JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS
NOVEMBER
2023

11

特 集

デジタル技術が役立った!

ITを使った活動事例

クロスロード

2023 NOV

Contents

表紙によせて

スリランカで発展が期待される野球の普及活動を行いました。写真は私の赴任と同時に野球を始めた子どもたちです。彼らは雨の日でもグラウンドに集まるほど野球に夢中でした。野球を職業にできる環境ではなく、家族から反対もされましたが、ルールを守ることやチームメイトと協力することなど、成長していく子どもたちを見て次第に応援してくれるようになりました。八木一弥さん（スリランカ／野球／ 2016年度2次隊・愛媛県）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

6 特集 デジタル技術が役立った！ ITを使った活動事例

14 派遣国の横顔 コロンビア ～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有 みんなの教材づくり＆アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来 進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！ 私の派遣国生活

■国別索引

	掲載ページ
ウルグアイ	18
ガーナ	24
ガボン	26
ケニア	4
コロンビア	16、17、18、19
スリランカ	1
セネガル	35
セルビア	36
チリ	34
ネパール	5
パナマ	30
パラオ	6
パラグアイ	24
フィリピン	12
ブラジル	8
ペルー	18、28
ボリビア	34
マラウイ	2
マレーシア	23
モンゴル	21
ラオス	18
ルワンダ	10

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	10
行政サービス	35
防災・災害対策	12
漁業	16
水産物加工	16
品質管理・生産性向上	18
品質管理	18
マーケティング	19
観光	36
理数科教師	5
青少年活動	17
環境教育	28
体操競技	30
野球	1、8
PCインストラクター	2
日本語教師	21
体育	34
小学校教育	6
幼児教育	26
幼稚園教諭	23
理学療法士	24
障害児・者支援	4

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
栃木県	5
東京都	12、18、30、35、36
埼玉県	28
長野県	24
新潟県	19
神奈川県	16、21、24、34
大阪府	23
兵庫県	8
徳島県	17
香川県	6
愛媛県	1、2
長崎県	10、26
鹿児島県	4

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

授業を行う竹内さん。パソコンのスキルを生かせる機会が少ないために興味を持てない生徒、逆に将来は技術者になりたいという希望を持つ生徒もいて、モチベーションの差が大きい中、皆が興味を持てるように授業内容を工夫した

子どもたちに伝えたいSDGs
世界の学校

停電の多いマラウイでパソコンの楽しさと可能性をわかりやすく教えました

竹内真理（たけうちまり）さん（マラウイ／PCインストラクター／2019年度3次隊・愛媛県出身）

マラウイの15歳から18歳が通うセカンダリースクール（4年制の中等教育機関）で、1・2年生の生徒にパソコンの基本操作とワードやエクセルといった基本ソフトの使い方などを指導しました。

コンピュータ室に置かれたパソコンは10年以上昔に使われていた古いパソコンの中古品で故障も多く、マウスは盗まれてパソコンと数が合わなくなっていました。生徒の多くが自分のパソコンやスマートフォンを持っておらず、キーボードやマウスに初めて触ります。ただ、中には家にパソコンがあるという生徒もいて、理解度に差があったため、授業の進め方には苦心しました。マラウイでは2年修了時に国家試験があり、これに合格しなければ進級できないのですが、実技の試験がないため、パソコンの操作に興味を持てない生徒もいました。

そこで、ビジュアル的にわかりやすい授業を心がけました。パワーポイントで写真を多く取り入れた色鮮やかな資料を見せたり、パソコンの仕組みや動かし方を動画共有サイトなどで探して見せたりと、生徒の興味関心を引き出すように工夫しました。

実際に使えるものを作ってみようと、オリジナルカレンダー作りも行いました。マウス操作を練習するためペイントツールで絵を描いてもらい、エクセルで作成したカレンダーに挿入します。生徒たちは、「こんなこともできるんだ」と喜んでくれました。

また、マラウイでは停電も頻発していて、授業中に突然電源が落ちてしまうことがよくありました。そこで常に2パターンの授業を準備して、停電のない時はできるだけパソコンに触ってもらい、停電時にはバッテリー内蔵の自前のプロジェクターで資料を映して、授業を止めない工夫をしました。実際にパソコンを使うメリットや楽しさを知ってもらうことで、積極的に授業を受けようという意識が高まったように感じます。

Text＝秋山真由美　写真提供＝竹内真理さん

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰
多文化共生賞

外国につながりのある子どもたちの実状を知り、多文化共生社会の実現を目指す

牧（まき） ちさとさん（ケニア／障害児・者支援／2016年度1次隊・鹿児島県出身）

2016年に現職教員特別参加制度を利用してケニアに赴任しました。派遣先は、知的障害のある5～36歳の生徒を対象とした全寮制の学校、マランダ特別支援学校です。私は校内の用務室に寝泊まりしながら、職業訓練コースの授業を受け持ち、昼夜、子どもたちと一緒に過ごしました。

帰国後は神奈川県の特別支援学校に復職しましたが、ケニアでの協力隊経験をどう学校現場で生かすべきか、悶々とした日々が続きました。転機となったのは、当時、協力隊の障害児・者支援職種の技術顧問をされていた滝坂信一先生から「神奈川県に住む外国につながりのある子どもたちの現状について知っていますか？」と連絡をいただいたことでした。

日本でも外国につながりがある子どもの数は年々増えています。知的障害や発達障害がある場合だけでなく、日本語の未習得、出自国と日本との文化や習慣の違いなど幾つかの要因が重なり、特別支援学校に入学するケースも少なくありません。自分の置かれた状況や進路に納得していなかったり、さまざまな葛藤を抱えたりしている子どももいます。

そうした子どもたちの実態を把握し、必要な支援や対策を考えようと、特別支援学校と小学校特別支援学級で教員をする協力隊経験のある人たちに声をかけ、19年に「外国につながりのある児童・生徒への支援を考える会」を立ち上げました。初期メンバーは先にあげた方々のほか、趣旨に賛同する学校管理職や教育委員会の職員など10人程でした。

月に1度の定例会を開催し、情報収集や課題の整理、学習会などを行っています。会のメンバーから、例えば「振替休日のために3連休になることを知らず、休日に登校してしまう児童がいた」といった実例を集め、どのように支援したのか、成功例や失敗例、支援のポイントと思われる内容を記載した「事例集」も作りました。まずは県内の学校間で共有し、支援や支援体制の構築に役立てていけたらと考えています。また、学校現場で用いている用語を言語支援が行き届かない少数言語に翻訳した「多言語活用集」を作成して教育現場に配布するなどを計画しています。

今回いただいた「第1回JICA海外協力隊　帰国隊員社会還元表彰　多文化共生賞」では、こうした『外国につながりのある児童・生徒』への支援体制の構築」が「隊員経験を活かし、特別支援学校や特別支援学級における外国につながりのある児童・生徒と保護者の支援体制に取り組んでいる。勤務校のみならず、県内在勤の協力隊経験のある教員のネットワーキングや、行政と連携した支援体制の構築など、様々なステークホルダーを結びつける行動は、多文化共生における後進のモデルになりうる」と評価していただきました。

今後は、海外経験のある協力隊員の視点や知識を学校現場で活かせるようなネットワークづくりにも力を入れ、外国につながりのある子どもたちの置かれている状況を理解して、適切な支援につなげられるような仕組みを構築していきたいです。

1 第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰授賞式で、外国につながりのある児童・生徒への支援を考える会のメンバーと。右から、林 正直さん、牧さん、柿原莉沙さん（マラウイ／障害児・者支援／ 2019年度1次隊）（3は授賞の様子）　2 JICA横浜での定例会議の様子。事例集の共有にあたり、個人情報の取り扱いについての議論が交わされた。メンバーは主に神奈川県の協力隊経験者や学校教育関係者だが、今後は協力隊経験者に限らず、広く募集していくという

Text＝秋山真由美　Photo＝飯澗一樹（本誌　表彰式）　写真提供＝牧 ちさとさん

from Japan

長年にわたるネパールへの支援 人々の心に希望の光を灯し続けたい

半田好男（はんだよしお）さん（ネパール／理数科教師／ 1991年度1次隊・栃木県出身）

2023年3月、30年余り続けてきたネパールへの支援の取り組みに対して、駐日ネパール大使から感謝状をいただきました。

大学卒業後に協力隊を志しつつ、最終的には栃木県で教職に就くことを選んだのですが、協力隊参加への思いは続き、卒業生を出した4年後に再度挑戦。現職のままネパールに派遣される機会に恵まれました。

任地であるトカルパ村の学校では、学年が上がるにつれて生徒数がどんどん減っていくという問題がありました。その背景には、家庭の貧困はもちろんのこと、教育の必要性に対する保護者の認識不足が影響していました。

就学率を上げるには生徒たちの両親に対する教育機会も必要と考え、協力を申し出てくれた先生と2人で夜間の識字教室を開くことにしました。住んでいる村から徒歩で30分余りの貧しい集落に夜な夜な通ったのですが、特に女性や低カーストの人が優先的に学べるように配慮すると、日中の仕事を終えた女性が熱心に通ってくるなど、反響は予想以上でした。

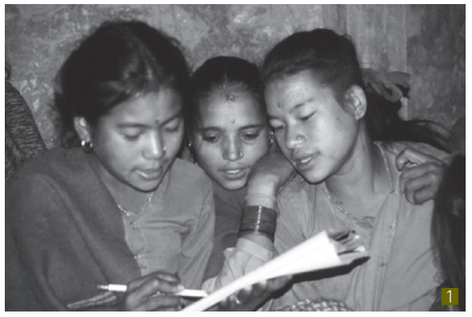
この活動は直接の要請内容ではなく、しかも2年目から任地が首都カトマンズに移ったこともあって継続が危ぶまれましたが、（一社）協力隊を育てる会の支援事業である小さなハートプロジェクトで資金を得られ、協力者や教室数も増えていきました。

そうして任期終了が近づいた時、今後も教室を開いてほしいとの声が多く寄せられました。そんなに要望があるのなら続けていかねばと、現地の協力者たちとNGOディーヨ・フォーラム（※）を立ち上げ、運営体制を整備してから帰国しました。

ただ、現地の人々には、自分たちができることは自分でやってほしいと思っていたので、私自身は日本で教員として働きながらできる範囲の取り組みに限定しました。それでも、村の人々も自分たちにできることをやってくれ、教室運営が継続できました。その後、教室での学びを経た女性たちが縫製教室を開きたいと動き出し、それを後押しする形で支援事業が拡大。その後も、支援の形はさまざまに発展してきました。

当初は子どもの就学率を上げる狙いから始まった活動でしたが、大人にとっても、読み書きを身につけることは自己の可能性に気づき、新しいことへの挑戦意欲を育む大きな契機になりました。学びの機会を得たある女性から、「真っ暗だった心の中に光が差し込んだようだ」と言われたのは忘れられません。

私は3月に定年退職を迎えました。今後は活動のあり方も見直しが必要でしょう。個人としてできることをベースにしつつ、支援に協力してくださる方々の力をお借りして、これからもできる限りのことを続けていければと思っています。



1 識字教室で声を出して教科書を読む女性たち
2 支援の一環で開いた編み物教室の参加者と話す半田さん。年に2、3回は現地を訪れて要望調査や聞き取りを行った

※ネパールでお祈りをする時に灯す、油皿にこよりを置いた明かりである「ディーヨ」にちなみ、村人の希望を灯す意味でこの名前をつけた。

Text＝海原美帆　写真提供＝半田好男さん

特集

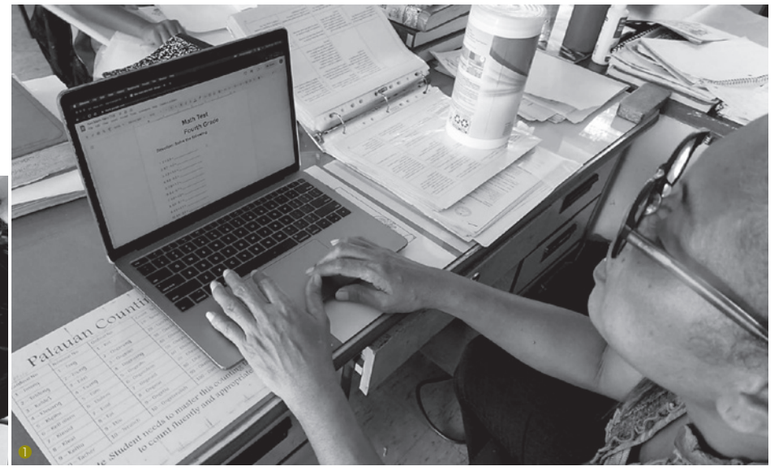
デジタル技術が役立った！

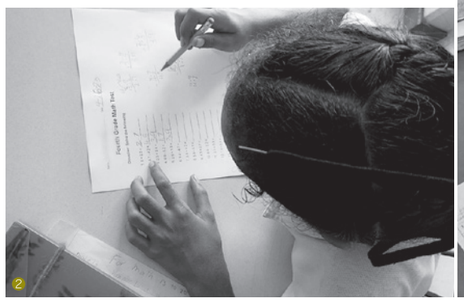
ITを使った活動事例

今や途上国でも多くの人の手にスマートフォンやパソコンが普及して、IT利用は生活の一部となっている。協力隊員も、派遣国の人々と一緒に汗水を流しつつ、同時にデジタルツールを賢く使うことで活動を飛躍させたいところだ。活動の中でITを生かした現役隊員やOVの方々にお話を伺ったので、任地での取り組みのヒントにしてほしい。

Text＝飯渕一樹（本誌　p6-7）、池田純子（p8-13）
写真提供＝ご協力いただいた各位

現役隊員によるIT活用例
ChatGPTで教員の負担を軽減！





❶パラオ人の先生がGPTドリルで算数のテストを作成する様子。筆算スペースを確保するため、あえて余白を広く取るという工夫をしていた。取り組みはパラオの全国紙でも紹介された
❷先生が作ったテストを解く小学校4年生の生徒。テスト結果は成績の評定に加えられた

既存のドリルの使い勝手に課題 AIで問題作成を簡単に

現在、パラオの小学校で活動中の筒井駿樹さん。同国では、過去の協力隊員が作成した「マスヒーロードリル」という算数ドリルが教育系隊員に受け継がれ、配属先の学校にも共有・活用されているのだが、課題もあった。

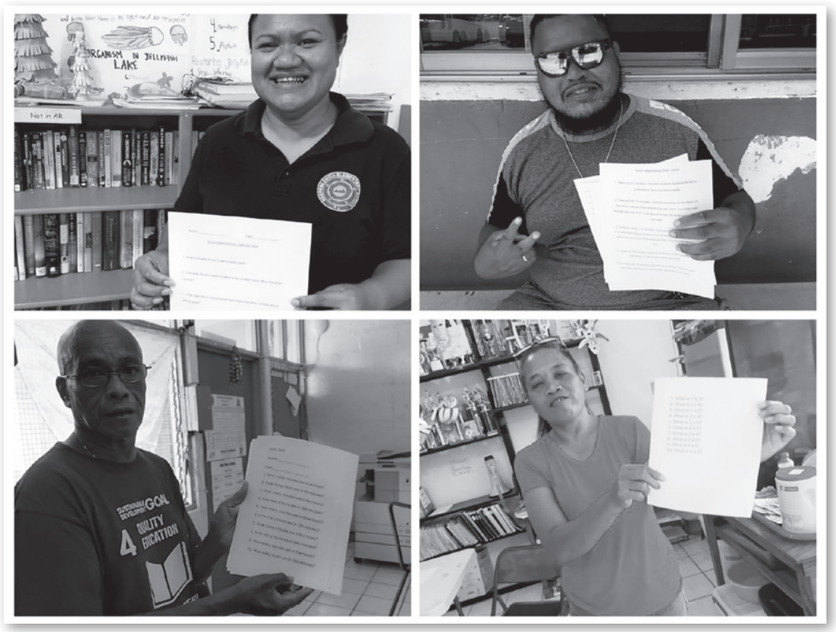
「原本をコピーして使うものなので、カバーされていない単元があったり、生徒のレベルに合っていなかったりした時にアレンジが難しい。また、ドリルの原本が職員室にあり、担任の先生が教室からいちいちコピーしに行く手間も感じました」

そこで、新しい問題を簡単に作ることができ、教員がPCからすぐ印刷できる方法はないかと考えた筒井さん。着目したのが、AIチャットボットのChatGPTだ。「ChatGPTのソースコードをGoogleフォームに移植し、フォーム上に『かけ算の問題／2の段から5の段まで／10問作って』などと打ち込めば自動的に問題が羅列される仕組みを作りました。私自身、IT系の知識には疎かったのですが、YouTubeで検索すれば参考になる動画がいろいろ見つかりました」。

〝GPTドリル〟として同僚の先生たちに共有したこのフォームはChatGPTと連携しているので、算数に限らず何の教科でも問題を生成可能。Googleフォーム上の文章をそのまま印刷できるため、初心者でも容易に扱える。もちろん、AIが誤った設問を作成することも考えられ、一度は教員自身が解いてみたりして内容を確認するように周知している。

「自らChatGPTで指導案を作るなど、率先して技術を取り入れて工夫する人も出てきており、AIの存在を伝えることはこれからの時代に即した技術移転の一つなのだと思いました」

各自工夫してプリントを作成した同僚の先生たち



筒井駿樹（つつい しゅんき）さん
パラオ／小学校教育／
2022年度1次隊・香川県出身

大学時代に訪れた途上国で、ストリートチルドレンの生活を目の当たりにして衝撃を受ける。現地の人の「子どもたちを救うには、魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える必要がある」との言葉で、教育の道に進んで途上国と関わることを決意。日本の小学校での5年間の動務を経て、現職教員特別参加制度で協力隊に参加。自身が去った後の取り組みの継続性を念頭に活動中。

野球のフォームを写真や動画で撮影し、SNSで指導

語学力不足で伝えたいことが伝わらない

捕球は中腰で、グローブをグラウンドにつけて構える、バットは手で回すのではなく、体をひねって押すように振る……。そんな細かい野球のフォームを言葉で伝えようにも伝わらない。2016年、日系社会シニア・ボランティア（当時）として野球指導のためにブラジルに赴任した今泉友秀さんは、早々に言葉の壁にぶつかった。

「主な指導対象は、民間の野球クラブの9～10歳の子どもたち。打撃や守備、送球など野球技術の向上などが要請でした。言語はポルトガル語だったのですが、こちらの語彙力が乏しく、言いたいことが伝わらなかったり違うように伝わっていたり。どうやったらうまく伝わるのか頭を抱えていました」

そこで今泉さんが思いついたのが、スマートフォンで子どもたちの動きを写真や動画で撮影、それを見せながら説明すること。データの共有には、SNSを積極的に用いた。

「まずは、毎回の練習時に、子ども一人ひとりのバッティングやピッチングの様子を写真や動画で撮影し、それをいったん家に持ち帰り、エクセルシートに写真とポルトガル語で説明を入れた個別のチェックシートを作成しました。動画もスマホ内のアプリで編集し、コメントを入れて親たちに送りました」

スマホを駆使し、一人ひとりの子どもに対してきめ細かくサポートし始めてから、効果はすぐに表れた。

「やはり画像と文章を合わせて説明されると『ああ、そうか』と自分のできていないところがすぐに理解できるんです。同じ情報を親にも簡単に共有できるので、家での練習にも役立っていたようですし、私のほうでも、一度データを持ち帰ることで適切な言葉を考える時間ができたのはよかったと思います」

チェックシートをデジタルデータで共有したのは、親が毎回の練習ごとに持参する手間を省くためだが、子ども向けにはプリントしたシートを渡すなど、媒体を使い分けた。

「低学年くらいの子どもたちはまだスマホを持っていませんし、やはり練習の場で直接プリントを手渡されたほうが嬉しそうでしたね」

自分だけのチェックシートをもらった子どもたちは、おのずとやる気スイッチが入る。特に中心選手はどんどん上達していき、今まで優勝したことのない大会に優勝することができたのは嬉しかった、と今泉さんは顔をほころばせる。

ツールはスマホだけ既存の編集アプリを活用

写真や動画は、すべて日本から持参したAndroidのスマホで撮影。送る時はメッセンジャーアプリのWhatsAppを利用した。今泉さんは、協力隊に行く前から、FaceBookやLINE、YouTubeと、SNSはひと通り利用していたため、現地で使うのに抵抗はなかったという。

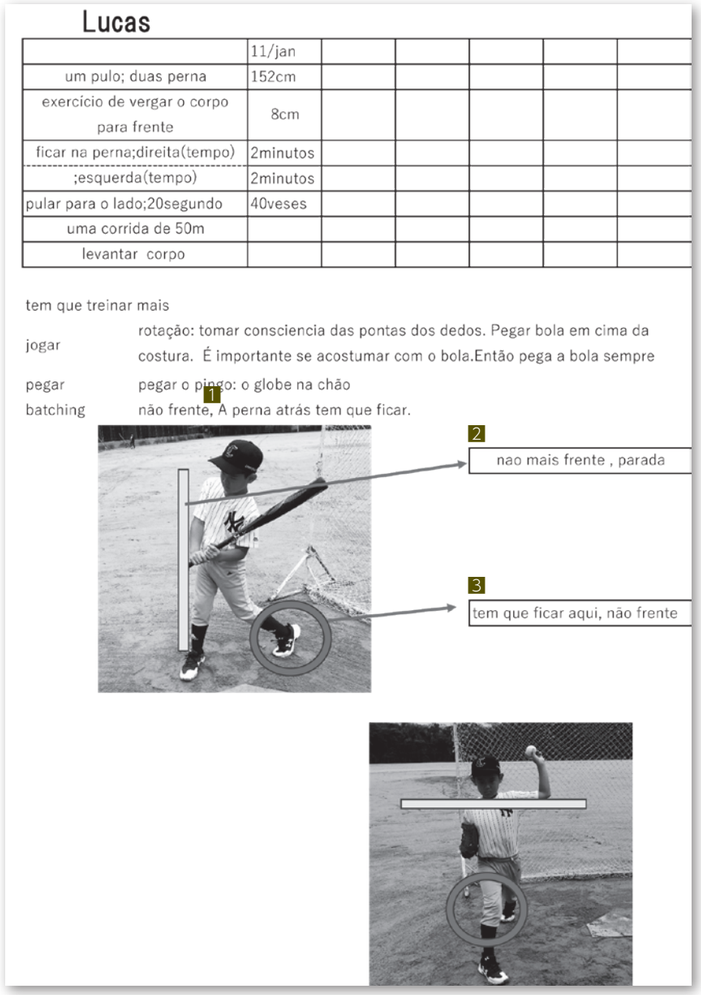
「ITについては日本より、ブラジルのほうが進んでいて、フリーWiFiの環境に至っては日本のほうが遅れているほどでした。私は60歳以上のチームの方にも教えていましたが、彼らにとってもスマホは当たり前のコミュニケーションツール。私も彼らのWhatsAppのグループに入れてもらいました。そこから、いろいろな情報を得られて、ブラジルのこともよく理解できました」

今泉さんにとって、言葉の壁を乗り越える助けとなったIT関連の技術だが、いったいどれぐらいの知識を身につけておけばよいのだろうか。

「そんなに難しいことはできなくても、スマホアプリで、動画を切ってつなげて、コメントをつける程度の簡単な編集ぐらいはできるといいですね。そういう意味ではAndroidよりiPhoneのほうが、いろいろなアプリが最初から入っていて便利かもしれません」

コロナ禍を経て、Zoomなど、簡便なITツールの選択肢はより増えてきた。難しく考えず、まずは気軽に使ってみるのがよさそうだ。

エクセルシートに写真を貼りつけた個別のチェックシート



Lucas

	11/jan					
um pulo; duas perna	152cm					
exercício de vergar o corpo para frente	8cm					
ficar na perna;direita(tempo)	2minutos					
;esquerda(tempo)	2minutos					
pular para o lado;20segundo	40veses					
uma corrida de 50m						
levantar corpo						

tem que treinar mais

jogar　rotação: tomar consciencia das pontas dos dedos. Pegar bola em cima da costura. É importante se acostumar com o bola.Então pega a bola sempre

pegar　pegar o pingo: o globe na chão

batching　não frente, A perna atrás tem que ficar.

1

2 nao mais frente , parada

3 tem que ficar aqui, não frente

画像と文字でフォームを伝える例

1 A perna atrás tem que ficar：「後ろの脚は留めなければならない」
2 Não mais frente, parada：「これ以上前に動かさず、止める」
3 Tem que ficar aqui, não frente：「ここで留める。これ以上前に出さない」

❶野球に関する技術の伝達だけでなく、挨拶や礼儀といったスポーツマンシップの確立も要請内容に含まれていた
❷配属先に通ってくるのは日系人が多かったとはいえ、言語はポルトガル語。意図を伝えるのに苦労した
❸優勝を果たした大会で、チームのメンバーたちと

今泉友秀（いまいずみともひで）さん
日系SV／ブラジル／野球／2016年度1次隊・兵庫県出身

子どもの頃から野球を始めて中学校、高校、大学と野球部に所属。日本の県立高校で教職に就いてからは野球部の顧問として野球を教えてきた。世界史の教員として23年間教壇に立ったのち、現職教員特別参加制度を使って協力隊に参加。ブラジルの明るく陽気な人間関係に惹かれ、復職した今は、学校内で「ベレーザ！」というポルトガル語の挨拶を浸透させている。

冷蔵庫のマグネットに着想！ 井戸に貼ったQRコードで住民が不具合をカンタン報告

❶実際にQRコードを読みとれるかどうか、現地の水委員会の人たちと確認
❷QRコードは、簡単にはがされないように、金属製のプレートで囲い、鋲でしっかりと設置
❸水委員会の人たちにQRコードの仕組みについて説明する

井戸の約3割が壊れっぱなしの任地

井戸の故障やトラブルが起こったら、スマートフォンでQRコードを読みとるだけで、郡庁の担当部署に情報が伝わる――。ルワンダの東部県に位置するキレヘ郡で、そんな画期的な仕組みをつくったのは、コミュニティ開発隊員の中尾祐成さん。要請内容は、水の防衛隊の活動として、郡庁の職員たちと共に井戸の管理をサポートすることだった。

「最初にカウンターパート（以下、CP）に、管轄地域にある井戸の数と、今稼働している井戸はどれぐらいあるかを聞いたところ、『わからない』と言われて衝撃を受けました」

中尾さんは郡内の村々に点在する井戸をすべて回って状態を確認し、さらに周辺住民の代表として井戸の点検などの日常的な管理を担う村の水委員会の人にも話を聞いた。そこから見えてきたのは、井戸が壊れてもどうしていいかわからず、壊れたら壊れっぱなしという問題。中尾さんが確認しただけでも、全体で30基ある井戸の約3割が壊れていた。

「本来は月に1、2回、郡庁の職員がそれぞれの井戸の水委員会の人のもとを巡回し、壊れていたら首都の修理業者に修理を依頼するという手順を踏むのですが、職員たちも他の業務に忙しくて、なかなかそこまで手が回らないようでした」

そこで中尾さんは、日本で働いていた時の経験に着想を得た。「ガス会社勤務時代、いろいろな家に定期点検で回っていました。その際に『故障などがあればこの電話番号までどうぞ』とマグネットシートやチラシを渡すと冷蔵庫などに貼る家庭が多かったんです。ルワンダでも井戸が壊れたらすぐに連絡ができるよう、何か設置できないかと思いつきました」

まずは「壊れたら郡庁まで電話をください」という立て看板を置いた中尾さん。しかし、電話がかかってくることは一度もなかった。

ITへの関心に着目 QRコードで故障情報を収集

どうしたものかと思いつつ、ルワンダという国の事情をよく観察すると、ITに興味を持つ人が多く、技術も普及していることに気づいた。

「学校でも盛んにIT教育が行われていますし、首都のカフェではスマホでQRコードを読みとって注文するのが一般的。そこで井戸にもQRコードを貼り、そこから読み込んだ情報を郡庁に送るという一連の流れができたらいいなと思ったんです」

郡のCPに相談して、セクターと呼ばれる下位の行政区の担当者、水委員会、村長などへつないでもらい、現場の人たちに許可を得た上で、QRコードの導入に取りかかった。

「スマホのカメラでコードを読みとると、井戸の状態についての質問フォームに飛びます。『異常がない』『完全に動かない』『部品が壊れている』『違和感がある』の4つの選択肢があり、次に故障に気づいた日付と詳細を記入する欄があり、写真も3枚添付できるようになっています。入力された情報はGoogleフォーム経由で郡庁職員へのメールが自動送信され、さらにエクセルファイルのような形で、いつどこの井戸が壊れたかという情報が時系列で反映される仕組みです」

さっそく管轄するセクターの7基でパイロット的に設置したが、すぐにはうまくいかなかった。

「QRコードをステッカーやラミネートフィルムの形で貼りつけたところ、はがされたり、見えないようにされたりといったいたずらに遭ったんです。そこでQRコードの素材を金属製やプラスチック製のものに変えてしっかりと固定し、簡単にはがされないようにしました」

入力が面倒にならないよう 質問フォームはとにかく簡単に

ようやくしっかり設置できてからは、さっそく4件も連絡が入った。

「完全に壊れた、継ぎ目が外れた、井戸のアーム部分がすり減った、細くなったといった情報で、すぐに修理業者に依頼し、以前より格段にスピーディに対応できました。緊急の故障連絡だけでなく、郡庁職員が毎月行っていた巡回点検も、水委員会や村長に見てもらってQRコードから知らせてもらうようにしました」

立て看板がダメで、QRコードが効果を上げたのはなぜか。

「電話口で状況を説明するのは面倒ですが、今回導入したQRコードの仕組みならば質問フォームを選択するだけで、簡単なんでしょうね。定期点検も含め、報告が面倒にならないためにも簡単な仕組みにしたのがよかったのかなと思います」

中尾さんの帰国後も、QRコードは活用されているという。

「CPたちだけで運用できるように教えていたので、今は私がいなくても回せると思います。同じ任地の今後はキレヘ郡全体、ひいては他の郡に展開していけばいいですね」

QRコードの質問フォームは、なるべく簡単に

Izina ry'akagari niry 'umudugudu *
回答を入力

Nimero ya Terefone *
回答を入力

Imiterere ya Nayikondo *
- Ibisanzwe
- Nayikondo yangiritse
- Hari imiterere idasanzwe
- Nayikondo idakora

Itariki igihe wayibonye
YYYY MM DD

中尾さんのプログラミングの学び方

QR コードを読みとり、Google フォームを経由し、郡庁職員に届く。そんなプログラミングに必要な知識は基本程度しか知らず、YouTube 動画でいろいろ学んだという中尾さん。「参考になる動画にたどり着くには、何をしたいか目的を明確にして検索すること。私の場合、『自動でメール送信する仕組みをつくりたい』という目的に沿ったキーワードで検索して動画を探しました。例えば『ホームページをつくりたい』なら、HTML、CSS、JavaScript、初心者、入門といったワードで検索していくといいと思います」

中尾祐成（なかおゆうせい）さん
ルワンダ／コミュニティ開発／2021年度1次隊・長崎県出身

大学4回生の時に、熊本地震の物資支援ボランティアに参加したのを機に海外ボランティアにも興味を持つ。卒業後はガス会社に就職し、3年間の勤務を経て協力隊に参加。2023年7月に帰国した。

手探りで基礎データを集めて現行のハザードマップをブラッシュアップ

必要な基礎データが手に入らない

市川龍之介さんがフィリピンのルソン島北部の町、ラ・トリニダードに赴任したのは2018年のこと。現地受入機関からの要請内容は、小学生への防災教育だったが、それ以前のデータ整備の必要性を感じたという。

「この地域は急峻な斜面の多い山岳地帯で、地滑りや洪水などの災害が発生していました。しかし既存のハザードマップでは広範囲が大雑把に危険ゾーンとして指定されていて、いざ災害が起きたらどこに避難すればよいかわからないような内容でした」

そこで市川さんは配属先の同僚らと話し合い、より細かく危険な場所を特定し、避難場所の情報も追加したハザードマップを作成することにした。ところが、そこで直面したのが、必要な基礎データが手に入らないという問題だった。

「マップを作る上では建物のデータやDEMデータ（地形データ）などの基礎データが必要で、日本ならばネット上などで簡単に手に入るようなデータなのですが、フィリピンではなかなか手に入らず、役場でも保有していませんでした」

特に地図のベースとなるDEMデータはどうしても必要で、JICAフィリピン事務所を通じて購入することを図った市川さん。だが、データの販売元がフィリピン国外の企業だったことから、事務所で直接購入することが規定上できなかった。結局は、フィリピンの商社を介して事務所が購入するという手順を踏むことになり、いつ手に入るかわからない状況になった。市川さんは、DEMデータが手に入らなかった時のことも考えて、別の方法でのデータ収集も始めた。

「役場が災害調査用のドローンを持っていたので、職員に飛ばしてもらって航空写真を撮りました。私自身、ドローンを使ったデータ収集は、この時が初めてでしたが、ネットで調べながら、ドローンが飛ぶ範囲を指定できる無料アプリなどを活用して、撮影したデータを素に3Dマップを作成していきました」

結局、DEMデータは1年後に購入でき、ドローンによる詳細なデータで精度の高いデータが求められる地域の情報を補いつつ、新しいハザードマップを完成させた。そして、そのハザードマップを住民が自由に見られるように役場のウェブサイトを立ち上げて公開し、さらにそれらのデータも活用して、一般市民向けの防災アプリを開発した。

「デザインやプログラミングは私が担当しましたが、どんな機能が欲しいのか、何があると便利かといったことはCPらと相談しながら進めました」

ハザードマップやアプリは配属先の人たちから、かなり好意的に受け止めてもらうことができた。特にアプリはフィリピン国内の自治体では初の施策でもあり、役場の入り口に大きな看板を掲げて紹介されている。

一斉帰国後にマニュアルを作成して現地に共有

アプリ開発後、市川さんは洪水が発生する場所をシミュレーションで解析した。それを素に改修工事の計画に取りかかろうとした矢先に新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、任期8カ月を残して帰国となった。

「中途半端に終わってしまい、このまま終わらせたくないという思いがあったので、任地で行ったすべての活動をマニュアルにして現地の同僚たちに送りました」。マニュアルには、各データの基礎情報をはじめ、ドローンでの地形撮影の手順、3Dマップを作る方法、洪水シミュレーションの仕方などをまとめてあり、総ページ数は115ページに上る。これがあれば配属先の人々はもちろん、後任の隊員も次の活動につなげやすくなるとの狙いだった。

その後、コロナ禍を経てようやく任地に後任が派遣されることが決まった。

「防災アプリは現在も継続して運用されていますが、町の人口14万人に対してダウンロード数は数千ほど。まだまだ少ないので、今後は学校での防災教育とも合わせて家族などに普及させることで、防災に関する取り組みが広がっていくのではないかと思います」。

協力隊活動でITを活用するメリットとして「費用対効果が高いこと」を挙げる市川さん。

「草の根活動でありながら広い範囲に影響を与えられますから、活動でどんどん活用していくといいと思います。私も、建設コンサル時代に地図ソフトは使っていたものの、プログラミングは大学時代に1コマ授業で取った程度。現地で必要に迫られて学びましたから、調べて答えにたどり着くエネルギーがあれば、誰でもできるはずです」

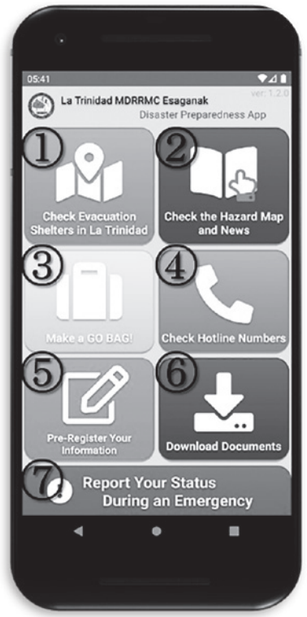
任期終了後は東京のIT企業に就職した市川さん。入社したのは、隊員時代に1年かけて手に入れたDEMデータを作っている会社だった。市川さんにとって協力隊活動自体が、次のステップにつながる経験になったという。

市川さんのプログラミングの学び方

市川さんの場合、まず自分の書きたいプログラミング言語をGoogleで調べるところから始めた。「アプリの場合ならJavaになるので、Java、入門と入力して検索。PDFを印刷し、冊子にして、読みながら勉強しました」。ひととおり読んだら、プログラミングの練習問題を解きながら学べるサイトでトレーニング。「基礎的な問題から複雑な問題まで、段階的に解けるので、自分のつまずいているところがわかるという利点がありました」。

避難所の確認から個人情報の登録まで、これ一つで備えられるアプリ

デザイン、機能は大阪市の防災アプリを参考にした



①避難所の確認／最も近い避難所の表示・経路案内
②ハザードマップとニュースの確認
③防災用避難バッグの案内
④緊急時のホットライン番号の表示
⑤救助用個人情報の登録
⑥災害危機軽減管理事務所が公表する資料のダウンロード
⑦災害など緊急時の自身の状態の通報

❶町役場の災害危機担当者たちとミーティング。ハザードマップの作成の進展状況について説明している
❷役所の入り口の右上に設置された、防災アプリの宣伝看板
❸役所の人にドローンを飛ばしてもらい、建物のデータなどを集めた

市川龍之介（いちかわりゅうのすけ）さん
フィリピン／防災・災害対策／2018年度2次隊・東京都出身

大学卒業後、建設コンサルタント会社に入社。自分の知識をより広いフィールドで役立てたいという思いから協力隊への参加を決めた。コロナ禍での一斉帰国後は、任期満了まで北海道で農業に従事。現在は協力隊経験も生かし、東京のIT企業で働いている。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈コロンビア〉

南米で唯一、太平洋と大西洋に面し、民族の文化と自然の多様性にあふれる国。

コロンビアの基礎知識

コロンビア共和国

面　積：約113万9,000平方キロメートル（日本の約3倍）
人　口：5,127万人（2021年、世界銀行）
首　都：ボゴタ
民　族：混血75%、ヨーロッパ系20%、アフリカ系4%、先住民1%
言　語：スペイン語
宗　教：カトリック

※2023年6月30日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/colombia/

派遣実績

派遣取極締結日：1985年1月4日
派遣取極締結地：ボゴタ
派遣開始　　：1985年7月
派遣隊員累計　：461人

※2023年9月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

教育や1次産業分野で継続して派遣 平和の定着を目指し地域開発、特産品作りも

50年続いた内戦に和平合意が成立し、経済成長が期待されるコロンビア。平和構築を重視するJICA事業の下、協力隊員が進める格差是正や地域開発にも期待が高まる。

＼お話を伺ったのは／

佐藤洋史（さとうひろし）さん

PROFILE
JICAコロンビア支所長。民間企業を経て、1998年国際協力事業団（現JICA）入団。ブラジル事務所、経済開発部、JICA横浜などで勤務。アンゴラフィールドオフィス代表、ブラジル事務所長、評価部次長を経て、2022年5月より現職。

近隣の山より望む首都ボゴタ。ボリビアのラパス、エクアドルのキトに次いで世界で3番目に標高の高い首都として知られ、赤道直下ながら比較的冷涼な気候である（写真提供＝JICAコロンビア支所）

「日本ではあまり知られてはいないかもしれませんが、コロンビアは中南米の国の中では、大きな国の一つです。人口は約5100万人で、ブラジル、メキシコに次ぐ第3位。面積は日本の約3倍で、ブラジル、アルゼンチン、メキシコ、ペルーに次いで第5位。南米で唯一、大西洋・カリブ海と太平洋に面している国です。カリブ海や太平洋沿岸、アマゾン地域は低地ですが、国土の南北をアンデス山脈が縦断し、首都ボゴタはアンデスの高地、標高2600メートル付近にあります。カリブ海沿いは熱帯性気候ですが、ボゴタは年中気温が低く、断熱性の衣類が手放せません」と話すのは、JICAコロンビア支所の佐藤洋史支所長だ。

国名は、1492年にアメリカ大陸に到達したクリストファー・コロンブスに由来する。15世紀以降、先住民やその土地はスペインの支配下に置かれ、さらに、多くの黒人奴隷がアフリカから連れて来られた。19世紀に入るとクリオージョ（現地生まれのスペイン系白人）がスペイン本国からの独立を志向し、「コロンビア共和国（グラン・コロンビア）」として現在のエクアドルやベネズエラ、パナマといった地域と共に独立を果たす。その後、各地域の分離独立が続き、1903年には現在の領土となった。

人口の約1%が先住民で、75%が混血。欧州系と先住民、欧州系とアフリカ系、先住民とアフリカ系などの混血があり、地域によって特徴がある。

60年代以降、貧富の格差も要因となり、政府と左翼ゲリラとの内戦が続いて麻薬組織も暗躍したが、2016年、政府と約50年にわたって戦闘を続けてきた左翼ゲリラ「コロンビア革命軍（FARC）」との間で和平合意が成立した。22年の大統領選挙では、グスタボ・ペトロ氏が勝利し、同国初の左派政権が誕生。ペトロ政権は、貧困層が多い地域の開発を重視している。

JICAがコロンビアに拠点を開設したのは1980年。「和平合意以前から平和構築を柱に据え、地雷対策や地雷で被害を受けた障害者の支援に力を入れています。格差縮小のための農村振興や特産品開発、人材育成も進めています」。

協力隊の派遣は85年に森林経営隊員と体育隊員から始まり、和平合意の前も安全確保を最優先にしながら、脈々と途切れることなく続いてきた。累計の派遣者が最も多いのは教育分野で、日本でJICAの研修を受けたコロンビア人（帰国研修員）と連携した活動もあり、理科や数学の教科書を一緒に作った事例もある。さらに、農業や漁業など第1次産業に関する隊員の派遣者数も多い。

「仕事があり、生活水準が向上すれば、武装ゲリラや麻薬組織に加わる住民は増えないでしょう。コーヒーや花卉（かき）が有名ですが、協力隊員の活動からこれらに続く特産品が生まれることも期待しています」

Text＝三澤一孔　写真提供＝ご協力いただいた各位

派遣国の横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈コロンビア〉

中田伊知子（なかだいちこ）さん

青少年活動／2010年度4次隊・徳島県出身

PROFILE

高校時代にカンボジアを訪れ、地雷のために足を失った人が義足でリハビリに取り組む姿を見たことをきっかけに理学療法士になった。海外支援への関心はあったが、理学療法士としての経験はまだ浅いと考えていたため、青少年活動の職種に応募。帰国後は、東日本大震災の被災市町村応援職員として宮城県石巻市で勤務し、仮設住宅での支援などに当たった。

紙すきの作業を見守る中田さん

金子さんが活動した時代のコロンビアの様子（クロスロード1987年1月号より）

金子 浩（かねこひろし）さん

水産物加工／1986年度2次隊、
日系／漁業／1990年度0次隊・神奈川県出身

PROFILE

実家は青果店だったが、中学時代から釣りに興味を持ち、大学で水産を学ぶ。卒業後、横浜市中央卸売市場での冷凍魚の販売を経て、協力隊へ。任期を延長して3年間、活動した。コロンビア移住を考え、1991年にJICAの海外開発青年事業に参加し、漁業用船舶の販売に従事。その後もコロンビアで仕事を続け、現地で刺し身や寿司などの魚の食べ方やさばき方の普及にも取り組む。

途切れなかった業務改善・生活向上への道

1985年の派遣開始以降、情勢が緊張する中でも隊員活動は途切れず続いてきた。

魚の冷凍技術の定着へ 作業員と一体で活動・生活

今よりも治安情勢に緊張感のあった1987年、水産物加工隊員として派遣されたのが、日本の市場の水産部門での経験があった金子 浩さんだ。

金子さんが派遣されたのは、カリブ海に面した、当時人口3万人ほどの漁村、トルー。村ではJICAが70年代後半から漁業支援を進めていて、その一環としてコロンビア政府との合弁で設立された水産加工会社のペストルー社があり、魚やエビの加工・冷凍を行っていた。ペストルー社での技術指導が金子さんの役割だった。

同社にはJICAから漁船が供与されていて、漁師たちが船に乗り込み、エビやタイ、クエ、カンパチなどの白身魚を捕っていた。そして、同じく供与されていた急速冷凍の設備や製氷機を用い、水揚げ後の魚介類を加工・冷凍した後、別の大きな水産加工会社に卸していた。

しかし、作業員たちは魚の加工や冷凍に不慣れだった。さばいたり、内臓を取り除いたりという工程を待つ魚が無造作に置かれていることや、少量の魚を加工するたび頻繁に冷凍庫を開けて中に入れるので庫内の温度が下がり切らないことなど、改善すべき点は山積み。魚を放置せずすぐに氷で冷やしたり、まとめて加工してから冷凍庫に入れて翌日まで開けないことで鮮度を落とさず急速冷凍したりと、基本的な事柄から指導した。新しいやり方を身につけてもらうため、金子さんは一緒に作業しながら、「がんがん、怒鳴った」と苦笑する。

他方、一方的な押しつけではなく、現地の人の話も取り入れながら活動すべきと感じるきっかけもあった。

着任2週間後、現地の人が魚のシチュー、サンコーチョ・デ・ペスカードを食べさせてくれた。揚げた魚や野菜を、ココナッツミルクなどが入ったスープで煮込んだ料理。とてもおいしかった。金子さんは食べながら、「教えなきゃ、教えなきゃと考えてやってきたが、俺は何しにここへ来たんだ。ここにあるものに学ぶこともある」と思ったという。

以降、現地の人と積極的につき合い、一緒に酒を飲み、誘われるままに踊った。工場の作業員はもちろん、漁師や船長が港に帰ってくるたび、一緒に飲んだ。ある時は漁船に乗り込ませてもらって10日ほどの漁に一緒に出たことで、漁師たちの信用も一気に高まった。人間関係ができると仕事もうまく回るようになり、1年がたつころには冷凍した魚の鮮度が目に見えて改善し、取引先からも「質が良くなった」と言われるようになった。

金子さんが日々の活動の中での悩みや不安を口にすると、作業員たちは自分のことのように考えてくれた。若かった金子さんが、年上でキャリアも豊富な日本人専門家との接し方に悩んでいると、仲を取り持ってくれた。「コロンビア人、いいなぁ、と。俺、日本に生まれたのが間違いだったんじゃないかと思った」と振り返る。

派遣後も約40年、コロンビアで水産・漁業関連の仕事を続ける金子さん。魚の加工処理や調理技術についての講習・講演も多い

活動を1年間延長した金子さんが帰任する時には、「あんたのおかげで加工技術が上がったよ」と多くの人から声をかけられた。「すぐに帰ってくるよ」と伝えると歓声が上がった。

有言実行でコロンビアへ戻り、水産分野の仕事に就いて約40年。隊員時代、コロンビアに刺し身や赤身魚を食べる習慣はなかったが、近年は魚食の普及が進み、コロンビア人が1年間に食べる魚の量は当時と比べて5倍以上に。寿司やマグロを食べることも定着してきている。

「この国で魚を捕る技術や加工方法、マーケティングを伝えたのは代々の隊員だと言っても過言ではないでしょう」と金子さんは誇らしげに語った。

障害者の社会参加へ 再生紙製作の作業を改善

コロンビアの社会では貧富の格差が大きく、障害者の社会参加の道も広くはなかった。そうした中、中田伊知子さんは2011年から2年間、障害児・者の社会参加を進める施設で再生紙を作る作業を支援した。

中田さんの任地はコロンビア第3の都市、カリ市。障害者への総合リハビリテーションを提供するNGO、イデアル財団に配属された。財団は医療・療育面の支援のほか、若者層（14歳～30歳）の教育や就労支援にも注力していて、中田さんが主に活動した就労支援部門では、障害者の作業療法の一環として、再生紙作りに取り組んでいた。

再生紙作りには、主に医療部門で使われた古紙を使う。その紙を水に漬けた後、ミキサーで細かく砕き、紙の繊維が混じった水を紙すき枠ですくい、乾燥させる。

派遣前に紙すきの技術補完研修（現在は課題別派遣前訓練）も受けた中田さんは作業を観察し、三つの課題を見つけ、改善に取り組んだ。その一つは、踏み台の導入。紙すきの作業は、約1メートルの高さの台の上で行われていた。体を動かすことは、特に機能障害のある人にとってはリハビリとして効果的だが、身長が低いために作業がやりにくい利用者もいた。

「体に合わせてやるほうがいいと思い、

活動の舞台裏

住む場所で決まる社会階層

コロンビア独特の社会制度に、住んでいる場所を基準に社会経済階層の区分を決めるEstrato（エストラート）制度がある。

エストラート1が最も経済力が低いとされる層の住む地域で、同6が最上位だ。

2011年からカリ市のNGOで活動した中田伊知子さんは、職場の同僚に「どこに住んでいるの？」と聞かれて答えた時の反応が忘れられない。

発展するカリの街（2013年ごろ）。地域により貧富の格差がかなりある（中田伊知子さん提供）

「尊敬を込めて『すごいね』と驚かれました。職場は『3』の地域で、同僚の多くは近くの同区分のところに住んでいたのですが、私の住まいは、JICAの安全規定により『5』の地域だったから、というのが後になってわかりました」

エストラート1から3の住民は、電話、電気、水道、ガスなどの公共料金への補助（減額）があり、減額分を5・6の住民が負担。制度は、経済的な格差の是正を目指すものでもある。

エストラート3の職場では時々停電や断水があったが、同5の中田さん宅ではほとんど起きず、ネット環境も整備されていたという。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈コロンビア〉

平山 将（ひらやま まさる）さん

マーケティング／2022年度7次隊・新潟県出身

PROFILE

国際協力の仕事に興味があったが、新卒では難しいと考えて不動産開発デベロッパーに就職。その時の経験を生かしてマーケティングの職種を選んだ。また、大学時代にスペインに留学したことから、スペイン語圏への派遣を希望した。私生活では、配属先職員のサッカーチームでプレーしたり、同期隊員の配属先メンバーとフットサルを楽しんだりとスポーツに精を出している。

ワークショップでマーケティングについて説明する平山さん

マニサレスでの活動当時、共同作業のグループワークに取り組むセミナーの参加者

松友正志（まつともまさし）さん

SV／品質管理・生産性向上／2015年度2次隊、
SV／ラオス／品質管理／2012年度2次隊、
SV／ペルー／品質管理・生産性向上／2019年度2次隊、
SV／ウルグアイ／品質管理・生産性向上／
2022年度7次隊・東京都出身

PROFILE

メーカーなどに勤務して工程設計や新製品開発、品質管理を経験。ベトナムやフィリピンなどへの赴任時代、移動中の車が交差点で止まるたびに駆け寄ってくる貧困層の子どもたちの姿に胸を痛めた。定年後、そうした子どもたちの家族を支えたいと協力隊に参加。最初の派遣ではラオスでSVとして活動した。続いてコロンビアで活動し、現在はウルグアイで活動中。

踏み台を置くよう提案しました。理学療法士の経験を生かせた部分ですね」

改善の二つ目は、すいた後の紙を乾燥させる方法だった。従来は新聞紙に貼りつけたり、紙すき枠上で乾燥させたりしていたが、ベニヤ板に紙を貼るようにしたところ、「きれいな紙ができるようになりました」。

しかし、三つ目の課題の解決は難しかった。それは、再生紙を作るために医療部門から持ち込まれる紙の束の多くにホチキスの針がそのまま残っていること。再生紙の質を下げ、時には針から「さび」が広がっていた。

中田さんは同僚に「針を取らないとだめだよ。ミキサーも壊れちゃうよ」と改善を呼びかけたが、返ってきた答えは、「外すの面倒くさいよ」。それならば医療部門にあらかじめ針を外すよう頼めばよいのではないかと提案すると、「じゃあ、イチコが頼んでよ」と言われてしまった。同僚たちは調整や連携が苦手で、他にも、事前に担当の職員が来ないとわかっているのに情報が共有されないことなどもあった。

うまくいかないことも多かった一方、同僚たちの心を捉えた取り組みが、水面に塗料を垂らして紙に写し取ることで、偶然生まれる模様を楽しむ「マーブリング」だった。

施設では、再生紙でしおりやノートやポストカードなどを作成し、来訪者に記念品として渡していた。中田さんはその中にマーブリングの作品を加えることを思いついた。「障害があっても自由にデザインが作れるし、コロンビア人は華やかなものが好きなので、気に入ってもらえると思いました」。

マーブリングの作業に取り組む施設利用者

専用のマーブリング液は現地には売っておらず購入できないので工夫を重ねて製作に臨んだ。試行錯誤の末、小麦粉を溶いた水を沸騰させてでんぷん状にし、油絵の具とテレピン油（※）を混ぜて作った専用の塗料を使用した。模様を写し取った後、小麦粉を洗い流して乾燥させれば完成だ。

想定どおり、同僚たちの反応は上々だった。「これ、いいね」「どうやってやるの？」と興味を持ち、利用者たちも嬉しそうだった。同僚はやがて、より安価で質のいい材料も独自に工夫して準備できるようになり、自ら指導もできるようになっていった。

南米のシリコンバレーへ 日本の知見を電子教材化

「南米のシリコンバレー」が、近年のコロンビアの成長を示すキーワードだ。地方都市で生産性や品質管理の向上を図るカイゼンの指導に取り組んだ後、政府のDX推進プロジェクトでもカイゼン手法を広めたのが松友正志さんだ。

松友さんは最初、コロンビア中部のアンデス山中に位置するマニサレス市の商工会議所に配属された。さっそく現地の企業を訪問して調査すると、課題はすぐに見えてきた。

「日本では会社に入ると、半年から1年間、新入社員教育を受けますよね。これが全くないんです」。そのため、社員には仕事に必要な知識がなく、特に顧客を大切にする意識がなかった。

しかも専門的な知識や同様の職務経験を持つ人を採用しているわけではなく、「縁故主義による採用が多く、特にマニサレスは、そうした傾向が非常に強い町でした」。

松友さんは、カイゼンに関するセミナーや、セミナー参加企業に対する個別指導などを進めた。セミナーで意識したのは二つの点。一つは、世界基準の生産性・品質管理の考え方を紹介した上で、カイゼンを紹介すること。「カイゼンは日本独自のもの、日本だからできると捉えられてしまうと、受け入れられないと思ったからです」

※テレピン油…松脂を蒸留した精油で、油絵の具を薄めたりする際に用いられる。

松友さんは品質マネジメントに関する国際規格ISO9001などを紹介し、「製品・サービスなどの継続的改善と向上」や「顧客満足の向上」が世界的にも重視されていることを伝えた。

もう一つ重視したのは、チームワークの大切さを伝えること。業務の何を見直すのか、チームで話し合うのがカイゼンの基本だからだ。グループワークを取り入れ、紙とセロハンテープだけで、できるだけ丈夫で、長時間崩れない建物を作る課題を出した。縁故主義が強いからこそ、知らない人同士でグループをつくり、取り組んでもらった。すると、「事前の想定とは異なり、みんなものすごくヒートアップしました。コロンビア人も、チームプレーが嫌いなのではなく、知らなかっただけなのだと実感しました」。

1年後、活動の転機があった。全国の企業を結ぶ情報ネットワーク網の整備とデジタル化を図る「Vive Digital」の一環で、「生産性向上や品質管理に関するeラーニングのコンテンツを作りたい」とコロンビアの商工観光省からJICAに協力依頼があったのだ。

「貧困層の多い山間部は道路も整備されていないところが多く、教育環境も整っていませんでした。その中で産業を興そうとすると、デジタル化で各地の中小企業をつなぎ、経営管理や部品調達、教育などを行うのが唯一の手段だったと思います」と松友さん。それは成長への道でもあり、和平を定着させる道でもあった。

コンテンツ制作に打ち込むため、異例だが、配属先が同省に変更された。eラーニングのコンテンツには、日本なら新入社員が入社から2～3年の間に身につける内容を盛り込むことにした。カイゼンを実践している様子を写真やビデオに収めるため、コロンビアに進出している日系企業にも連絡し、協力を得た。実際の状況を想定したテストも盛り込んだ。

省庁の職員には、アメリカの大学院に留学し、修士号や博士号を持っている人が多かった。経済理論には詳しかったが、現場経験は乏しく、「相談する相手もいない状態で、作業のすべてが大変でした。かつて会社で仕事している時より働きました」と笑う。

コンテンツは離任直前に完成。配属先からは「公開後すぐに3000人が登録する人気のコンテンツになった」と報告を受けた。

農業・市場の収入増加へ 農家自身の意識改革を重視

1950年代には、コロンビアの人口の約60％が農村に住んでいた。しかし、農村地域での反政府ゲリラの活動の激化もあり、多くの住民が都市に移動し、2000年代初めには農村人口の割合は20％を切った。治安回復と共に農村地域への回帰の動きも見られる中、マーケティング隊員の平山 将さんは22年8月から、小規模農家の収入向上や市場の改善に取り組んでいる。

平山さんの配属先は、北東部に位置するコロンビア第5の都市であるブカラマンガで活動するNGOコンプロミソ。NGOの農家支援チームが対象とするのは、県内3都市にある15の集落の計約150世帯の農家だ。集落は都市の周りの山岳地域に分散し、キャッサバやコーヒー、カカオ、オレンジ、トウモロコシなどが栽培されている。

平山さんはスタッフと共に農家の経済状況などを把握し、農家の人々自身も自らの状況を把握できるよう取り組んできた。最初の大事なステップが帳簿の作成と記録だ。効果を上げるため平山さんは、JICAがアフリカや中南米で展開する「市場志向型農業振興（SHEP）アプローチ」を取り入れた。SHEPには四つの段階があり、その第1段階が各自の生産や販売などの状況の把握。第2段階が、需要の整理で、第3段階でどの作物をいつ、どれくらい作るかを決め、第4段階が作物を作る技術の指導だ。

コロンビアの農家の多くは元々、自分たちで食べるために農作物を栽培し、残ったものを市場で売っている。そのため、需要に合わせて作物を作ったり、より高い価格で売ったりという発想が

SHEPの第1段階の一環で、農家の人たちの農耕技術やマーケティング意識を把握するためのアンケートに答えてもらっている様子

あまりない。しかし、収入向上への意欲自体は高く、コンプロミソが行うワークショップには、片道2時間近くをかけてやって来る参加者もいる。同僚が実施するワークショップなどにも合わせつつ、これまでに2つの都市の周辺で特に力を入れて活動してきた。

今後、残り1年を切った任期の中で、平山さんはSHEPの第2段階以降の取り組みと共に、市場の改善を進めたいという。現在の集客などを改善するほか、既存の市場から離れている農家のため、「中間地点」に新たな市場を開設できないかとも考えている。しかし、具体的な取り組みを実施することは以上に、平山さんが実現したいと考えていることがある。

「市場の運営や活用に関しても、どういう課題があって、どう改善していったらいいのか、農家さんたちが自分たちで見つけて提案できるようになってくれればいいと思っています。農業や市場のことを一番知っているのは農家さん自身ですし、私がここで活動できるのは2年間しかないので」

そのために、コンプロミソのスタッフの意識も変える必要がある。「彼らは優秀で、大学で農業知識も学んでいるので、つい自分たちでやりがちなのです。でも、彼らがやってしまっては、農家自身で改善を進めていく持続性が生まれません」と平山さんはいう。

長く続いた内戦で、ブカラマンガの街でも手や足を失った人と出会うこともある。一方、治安と経済は大きく改善し、尻ポケットにスマートフォンを入れて歩く人も少なくないという。

「将来、農業をやりたくないという子どもも多いですが、農業で収入を上げられるようになれば、農業に可能性を感じられるようになります。子どもたちの中から農業に従事することを選ぶ人が一人でも増えてくれたら」と平山さん。それは内戦で荒れた農村の回復と、格差の縮小にもつながるだろう。

活動の舞台裏

渋滞改善へマイカー規制

コロンビアの課題の一つが深刻な交通渋滞。ブカラマンガを拠点に農家の支援に当たる平山 将さんは「朝・夕の道路はかなり混んでいます。バイクの利用者も多く、交通事故もよく目にしますし、排気ガスの影響など、環境面からも問題です」と話す。

1990年代以降、JICAの提案と協力で、ボゴタに専用レーンを走るBRT（バス高速輸送システム）が導入されたりしているが、電車はメデジンの街にしかなく、車の増加に追いついていない。

ブカラマンガ最大の幹線道路での帰宅ラッシュ。
多くの車やバイクが道を埋め尽くしている（平山 将さん提供）

こうした中、マイカーの利用制限も導入されている。偶数のナンバーの車しか使えない日、奇数の車しか使えない日が設定されており、さらに年1回程度はバスやタクシーしか使えない日もある。「最初は気づきませんでしたが、いつもと比べて静かだなと感じました」。

もっとも、複数の車を持つ富裕層は制限を逃れているともいわれている。渋滞は経済成長の象徴でもあるが、課題解決は難しそうだ。

いま、読みたい電子書籍

ロシア語話者に教える

著　：東出 朋、大澤恵利
発行：Web Japanese Books
https://webjapanese.com/archives/8706

この方に聞きました！

著者
大澤恵利（おおさわえり）さん（旧姓 後藤）
モンゴル／日本語教師／
1996年度1次隊・神奈川県出身

職種・任地を問わない異文化コミュニケーションのヒント

「隊員時代は、日本ではああする、日本人ならこうする！と偉そうに言っていました」と振り返るのは、本書の著者の一人、大澤恵利さんだ。

日本語教師として派遣されたモンゴルの首都・ウランバートルのモンゴル国立外国語大学で、遅刻してきた学生が教室に入るなり「すみません」の一言もなく「バスが途中で止まったので歩いてきた」と言い訳をするのを許せず、思わず説教してしまったという。同じように現地の人の言動にカチンときた経験は、隊員なら誰もがあるのではないだろうか。

ただ、それが〝言い訳〟に聞こえるのは日本人だからかもしれない。モンゴルからの帰国後、ロシアで計11年間暮らして日本語教師の経験を積み、また自らも現地の学校でロシア語を学んだ大澤さんは「日本ではまず謝るのが丁寧な姿勢ですが、最初に理由を伝えるのが礼儀と考える文化もあるかもしれないと、今は思います」と話す。

本書のテーマはロシア語を母語とする人々への日本語の教え方を説くことだが、その中でも同様に、日ロでの言葉の解釈の違いが紹介されている。例えば、誰かを招待する時、ロシア人ならば「日曜日、私の誕生日なの。絶対に来てね。もし7時に来られないなら、遅く来てもいいよ。待ってる（本書p.48より）」と願望を強く示し、時間の代替案まで出すことが誠実さの表れとされる。これが日本人なら気遣いで「来られそうになければ無理しないでいい」などと遠慮することもあるだろうが、ロシア人の感覚から捉えれば丁寧ではなく、逆に「断ってほしい」という意味にさえ受け取られてしまうという。

協力隊の派遣国にもロシア語を使用する国があるので本書の内容を参考にしたいところだが、他地域の隊員でも、異文化コミュニケーションについて考えるための読み物として興味深く読めるだろう。自分は丁寧な姿勢を示したつもりなのになぜか冷たい反応が返ってくる場合、文化的な誤解が背景にあるかもしれない。逆もまたしかり。日本人には礼儀知らずと映る行動が、実は現地では丁寧な態度である可能性もあるわけだ。

「語学訓練は文法など最低限の意思疎通を図る勉強が中心ですが、相手の言葉の意図を理解するには文化に基づく言葉の捉え方や言語観、その国の歴史などを知ることも大切です。本書でも、単にロシア語や日本語教育についての解説だけでなく、そうした異文化理解につながるトピックに力を入れました」

Text＝内井理美　Photo（書影）＝千川 修　写真提供＝大澤恵利さん

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

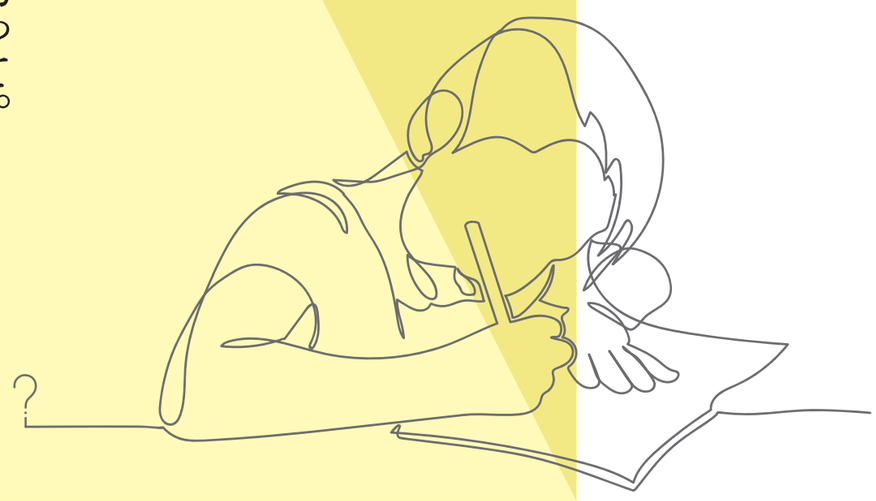
今月のテーマ：変えられないことが多すぎる

今月のお悩み

カリキュラムが変えられない以上、何をやっても無駄に感じます。

（幼児教育／男性）

派遣国のカリキュラムは、幼児教育であっても、小学生のように文字や数字を覚えさせることが多いです。数字も1、2、3と復唱方式で暗記させます。先生たちも「教える」に特化していて、子どもたちと遊ぶといった感覚はなく、スカートやヒール姿です。そうした中で一人の隊員が何をやっても無駄なのではと、やる気を失っています。



坪川先生からのアドバイス

目に見える成果は出ないものと割り切って。カリキュラムにつなげられる遊びがあれば、提案してみましょう。

幼児教育が根づいていない国に派遣される隊員に、派遣国のカリキュラムを変える力はありません。そこで、カリキュラムに遊びを織り交ぜられることはないかと考えたヨルダンの隊員が、アラビア文字を書く際によく使う丸（〇）に着目し、「いろんな色でシャボン玉を描いてみよう」と、遊びとカリキュラム（〇を描く字の練習）を結びつけた好例があります。「シャボン玉を楽しく描いていく過程で、子どもたちは〇を描けるようになり、それが結果的にアラビア文字の練習につながる」ことを提案すれば、現地の先生もやってみようという気になりますね。

こうした視点で考えていくといいかもしれません。例えば数字を学ぶ時。派遣先の先生は復唱方式で教えますが、1、2、3…と数字を暗記させても、幼児に数字の概念は伝わりません。子どもたちは正直ですから、つまらなければ集中しませんし、騒ぎだしてしまう子もいるでしょう。でも、「そこの落ち葉からきれいな3枚を選んできて」と子どもたちに投げかけるだけでも、数を学ぶ機会になるのではないでしょうか。日常生活の中に数量が含まれているものはたくさんありますから、「ままごとのような環境を整えるだけで、子どもたちが数量を体感できる」といった説明をすれば、先生たちの協力を得られやすいと思います。

幼児期には幼児期に適した学び方、つまり、「遊びを通じた学び」があります。例えば、派遣先で隊員がそれを実践した時、「遊ばせるためにお金を払っているのではない」と、保護者が怒ってわが子の通園を辞めさせようとしたものの、子どもが泣いて抵抗したため、保護者の意識が変わったという話を聞いたことがあります。「うちの子が『今日は日本人の先生が来て、こんなことをやった』と笑顔で話してきた。こんなことは今までなかった」と保護者が言ってくることもあるそうです。

このように、子どもが目に見えて変われば、保護者だけでなく、先生の意識も変わっていきます。一人でも隊員の活動に共感してくれる先生が出てきたら、そこを突破口として周辺の園の先生方を集めたワークショップを行うと、次の活動に発展しやすくなります。先生方にもライバル意識がありますから、「あの先生がやるなら、私もやるわ」と、一気に各園に広まる可能性もあります。

とはいえ、初代の隊員は特に、派遣先の変化を感じるような活動がなかなかできず、落ち込むことが多いと思います。私も技術顧問として、「先進国の幼児教育を紹介する本はたくさんあるけど、途上国の幼児教育を紹介する本はない。あなたの報告書が次の代につながっていくと思って、自分一人ではびくともしない岩があったら、そのことをしっかり報告書にまとめてほしい」と伝えています。

一方、隊員自身は「何もできなかった」と思っても、変化が起きていることもあります。

スリランカに初代で派遣された男性隊員の話です。女性の先生方から「私たちの仕事は教えること。だから子どもたちと一緒に遊ぶなんてできません」といった対応をされる中、彼は毎日子どもたちと遊び、その姿を先生方に見せていたそうです。当然、園の子どもたちは見違えるように生き生きしてきます。

すると任期終盤頃、いつもスカートにハイヒールを履いていた女性の先生が、パンジャビドレス（パンツ姿）にローヒールの靴を履いて登園してきて、「これから、体操がある日はこの服で来るわ」と言ってくれたというのです。ある隊員が「自分たちは先生と子どもたちがいい関係を築けるようにする黒子の役割だ」と話してくれたことがありますが、まさに彼は黒子の役割を果たしたと思い、感激しました。

協力隊員時代の私もそうでしたが、変えられないことばかりでやる気がなくなった時には、隊員同士で集まって、おいしいものを食べながら愚痴を言い合ってストレス発散しましょう。何代も隊員が根気よく巡回して、少しずつ少しずつ幼児教育のイメージを広げていくことが、将来的な成果につながると信じ、踏ん張ってみてください。

今月の教える人　坪川紅美（つぼかわくみ）さん

（マレーシア／幼稚園教諭／1988年度2次隊・大阪府出身）
JICA海外協力隊技術顧問（幼児教育）

マレーシアにおけるJICAの技術協力プロジェクト「全人教育推進プロジェクト」幼児教育短期専門家。ピアジェ理論（※）を土台に、子どもの発達に視点をおいた保育実践の在り方について、国内・海外で現場の先生方と模索している。

※ピアジェ理論…スイスの心理学者、ジャン・ピアジェが提唱した認知発達の理論。乳幼児期から青年期までを四つの発達段階に分け、子どもが能動的な行動から認知を発達させていくことを説いた。

Text&Photo ＝ホシカワミナコ（本誌）　※質問は現役隊員やOVから聞いた活動中の悩み

この職種の先輩隊員に注目！

現場で見つけた仕事図鑑

#0026

「理学療法士」

分　　類：保健・医療
派 遣 中：28人（累計：663人）
類似職種：障害児・者支援、作業療法士

※人数は2023年9月末現在

「理学療法士」職種の隊員は病院や障害児・者施設、特別支援学校などに配属されて、患者への理学療法、地域社会に根ざしたリハビリテーション（CBR）活動の実践・普及、同僚への技術指導などを行う。理学療法士の国家資格は必須で、3年以上の臨床経験をもって活動する隊員が多い。

CASE 1 業務を通して同僚の信頼を得て地域や大学にも活動を広げる

ブラジルとの国境に近いパラグアイのミンガグアス市役所に派遣された長田真弥さん。活動先は市が運営管理するリハビリ提供施設で、同僚と共に障害のある人や高齢者など地域の人に低額でリハビリを提供しながら、同僚に対して治療計画の作成や患者のデータ管理方法などをアドバイスした。

長田さんが治療に当たりながら感じたのは、一般の人も医療関係者も機能障害を改善するリハビリへの理解が十分でないため、正しい治療を受けていないことがあること。また、健康や食生活に関する知識が少ないこと、バイク事故などによる外傷が多いもののけがの応急処置に対する基礎知識が少ないことにも気づいた。

そこで「持てる知識で、地域に基本的な治療や健康について啓発したい」と、施設の待合室へのポスター掲示やホストファミリーをはじめとする口コミ経由で希望に応じた内容で講習会を行うという広報を実施した。患者や家族を対象に運動や介護方法の講習会、看護師や消防士を対象に勉強会を開催した。内容を説明し実践してみせる教え方はわかりやすく好評だった。

一方、患者を個別に隔てていた木の板の壁を取り払い、同僚と互いの治療の様子を観察しながら業務を行ううちに信頼を得た長田さん。大学の教員も務める同僚から授業に誘われ、学生の指導にも当たるようになった。「教えたことを実践する学生や、熱心に指導に取り組むようになった同僚の姿を見て、これが技術を伝えるということなんだと感じました」。

CASE 2 巡回リハの結果をフィードバックし専門クリニックやデイサービス開設へ

柳 沙希さんの配属先は、リハビリと義肢装具製作を行うカソリック系のNGOで、アメリカ人の施設長の下で90人のスタッフが働き、さまざまな国のNGOやプログラムから支援や寄付を受け運営されていた。対象は乳児から成人まで、脳卒中、骨折、切断、脳性まひ、水頭症、先天性内反足のほか、日本では少ないポリオなどの疾患のある人で、ガーナ国内のみならず西アフリカ中から患者が集まっていた。

柳さんはリハビリ部門で診療を行ううちに「お金がなければ安価とはいえ義肢装具は買えないし、施設に来ることもできない。さまざまな事情でここに来られない人が多くいるのでは」という疑問を抱えるようになった。

配属先に地域での調査を兼ねた巡回リハビリを提案すると、同僚たちは「仕事を増やしたくない」と協力的ではなかったが、施設長が理解を示し地域のクリニックの看護師を紹介してくれて、週1回、二人で訪ねて回った。

「すると、配属先から徒歩数分圏内に多数見つかりました。収入がないため障害児・者がいても治療を受けさせられない家族、義肢装具がないため家で横たわるしかない人、それによってさらに二次的な障害を患う人、手術が必要な人など、リハビリを行う以前の人もいました」

柳さんたちはそうした人たちを医療機関や貧困家庭を支援するNGOなどにつなぎ、栄養状態が悪化している障害児を配属先で預かったりした。

「最大の問題は、障害児を抱えた親が疲弊して子どものケアを諦めてしまうことでした。子どもは身体を動かせず、学校にも行けず、場合によっては存在を隠されていることもありました」

危機感を持ち巡回診療の様子を配属先に報告し続けた柳さん。その声は配属先を動かした。3カ月後には脳性まひ専門クリニックが開始され、障害児のデイケアサービスも任期終了直前に開設されたほか、柳さんの帰任後も巡回リハビリを継続することが決定した。

赴任 → 序盤 → 終盤 → 帰国

CASE 1 一般診療を行いながら地域や学生にも技術移転

長田真弥（おさだしんや）さん
パラグアイ／2017年度1次隊・長野県出身

PROFILE
高校時代、野球で肩や足を故障した際に理学療法士の治療を受け同職を志す。協力隊OVだった大学の恩師の影響で協力隊を知る。資格取得後、急性期医療の総合病院に4年、老人保健施設の訪問リハビリに1年従事後、退職し協力隊に参加。帰国後は以前の勤務先に復職し、大学院で公衆衛生学も学ぶ。国際リハビリテーション研究会でも活動。

配 属 先：ミンガグアス市役所
要請内容：パラグアイ東部のミンガグアス市内にある市役所が運営管理するリハビリ施設にてスタッフの理学療法士と共に業務を行いながら、リハビリ技術の向上支援や、治療計画の作成・患者のデータ管理方法についてアドバイスを行う。

最大のピンチ

「クリニックを回すのにあなたは呼ばれたのよ。私が出産で休む間、しっかり稼いでね」。配属されて早々、たった一人の同僚からそう言われ、「そうじゃない」と言い争いになりました。市役所のカウンターパートからきちんと配属理由が伝わっていなかったようで、そこで改めて自分が来た目的と考えている活動内容を話すと、理解し協力してもらえるように。それでも、しばらくはマンパワーとしての日々が続き「ここに何を残せるのだろう」と悩む時期が数カ月続きました。

最高のやりがい

地域でも治療を必要としている人が多いため、訪問リハビリを行う長田さん

大学での指導で、学生が私のやり方をまねて、患者さんたちに目的や意味をきちんと説明してリハビリを提供する姿を見られたことです。それまでは、教員が「この運動をこの回数でさせて」と指導し、学生はそれをそのまま患者さんにさせていたのですが、運動の意図や姿勢に注意を払うことなど大切なポイントを伝え、動画を撮って違いや変化を確認してもらい、記録をつける重要性も伝えました。その成果を実感し、教育に携わる醍醐味（だいごみ）もわかりました。

CASE 2 地域の障害児・者家庭が抱える問題に取り組む

柳 沙希（ゆうさき）（旧姓 柴田）さん
ガーナ／2015年度2次隊・神奈川県出身

PROFILE
奨学金を受けていた高校時代に厳しい境遇にある海外の若者と交流したことを機に国際協力を志す。専門学校で理学療法士の資格を取得後、病院に4年半勤務し、回復期と神経難病のリハビリテーションに従事。退職して協力隊に参加。帰任後もガーナでボランティアなどを行い、現在、南アフリカ共和国で子育て中。

配 属 先：義肢装具訓練センター
要請内容：身体障害者の義肢装具製作と訓練を行うカソリック系のセンターで、先天性障害を持つ乳幼児から切断手術後の成人まで障害者に理学療法を実施、自宅などで行うリハビリ方法の指導、義肢装具の装着具合のチェックなどを行う。

最大のピンチ

人々が医療を呪術や薬草療法、さらには宗教と同列で扱っていることでした。そして、まひも含めて「すべての病気は治る」と信じている人が多いのです。医療従事者の威圧的な態度と説明不足、人々の科学知識の理解が十分でないことと相まって医療に対する不信があり、呪術や宗教に頼ったほうが救われるという価値観がありました。巡回診療では、それらを否定せず、「魔法のように治ったりしないけど、ここまで一緒に頑張ってみない？」と足しげく通いました。

最高のやりがい

巡回診療で見つけた障害のある子どもが学校に行けるようになったり、手術を受けられたり、車椅子に乗れるようになったり、自分の関わった患者さんやその家族が前よりも楽しそうに生活していることを感じた時です。ガーナでは医療機関や福祉サービスの連携がなされていないため、障害児を抱えた親はあちこちを訪ねても障害がよくならないと疲れて果てていたので、私たちが寄り添うことで少しでも希望を持てるようになればと思って活動していました。

コミュニティで訪問リハビリを行う柳さん。「悩みや不安を打ち明けてもらえるよう頻繁に通いました」

赴任 → 序盤 → 終盤 → 帰国

Text＝工藤美和　写真提供＝長田真弥さん、柳 沙希さん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

小川恵美（おがわえみ）さん

（SV／ガボン／幼児教育／2019年度3次隊・長崎県出身）
教員養成校を卒業後、働きながら大学・大学院に進学。保育園、幼稚園、子ども園で長年、幼児教育に携わり、保育者の養成校でも教壇に立つ。以前から海外での仕事や海外協力隊に興味を抱き、幼児教育分野での経験を積んだ上で参加。帰国後は多文化保育に携わりたいと現在、情報収集中。

植物や動物をテーマに園児向けの教材づくり

ガボンの就学前教育局に赴任して、各幼稚園の先生を監督する指導員を対象に、情操教育につながる遊びの紹介などを行った小川さん。

教材づくりで着目したのは、ガボンの豊かな自然や動物をテーマにすることでした。

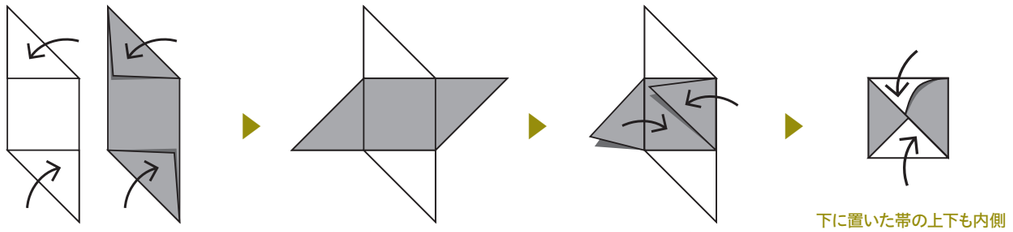
「日本人の私からしたら、特徴的な木や葉っぱ、さまざまな動物、伝統文化など、貴重なものがいっぱいでした。それらを見ていると、自然と教材づくりのアイデアが湧いてきました」

今回は、いろいろな遊び方ができるカード、自然素材で作るお面、動物について学ぶ教材づくりを紹介します。

自然素材のお面作りをした指導員の方々。
作ったお面をかぶって芝居を披露した指導員もいた

いろいろな遊び方ができる正方形カード

紙を折って正方形のカード状の教材を作ると、いろいろな遊びができます。このくらいなら折り紙が苦手な人でも簡単に折れますし、紙を切るところまで先生が行って、園児たちに折ってもらってもいいでしょう。同じ形状のものをたくさん作っておくことで遊びが広がります。



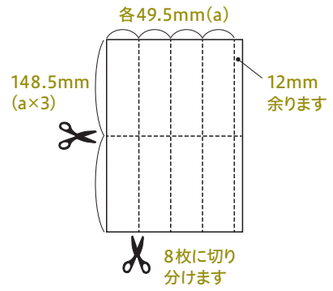
帯の上下を互い違いに三角形に折ります。

2枚の帯を図のように重ねます。

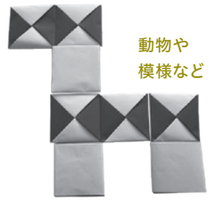
上に置いた帯の左右を内側に折ります。

下に置いた帯の上下も内側に折り、先に折った上にある帯の下に差し込みます。

A4サイズの用紙の場合

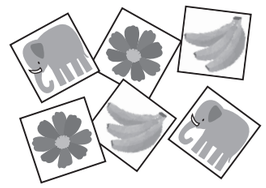


遊び方



動物や模様など

模様を生かした形づくり



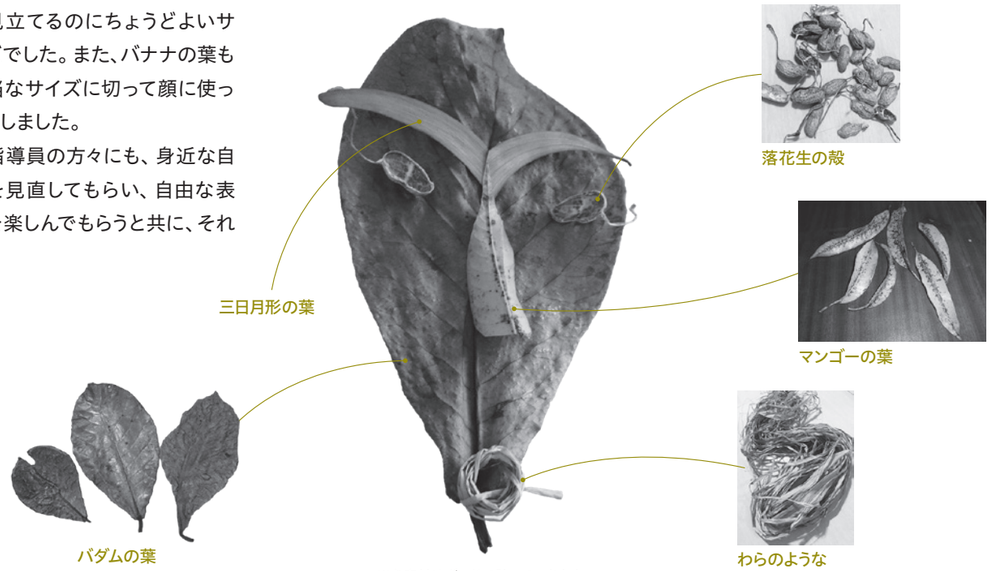
同じ絵を2枚に描いて神経衰弱

他にも、①2種類の色違いのカードをたくさん並べて「ヨーイドン」でどちらの色のチームが多くひっくり返せるか競う、②カードにサイコロの目を描いてひっくり返した枚数の和を答える、③カードにアルファベットを書いておいて自分の名前を作る、などの遊びができます。

自然素材で作るお面

ガボンに伝わるお面の伝統文化にインスピレーションを得て、オリジナルのお面作りをしました。主に身近にある自然素材を使用しました。ガボンにはバダムという木が生えていて、その葉は大きく、顔に見立てるのにちょうどよいサイズでした。また、バナナの葉も適当なサイズに切って顔に使ったりしました。

指導員の方々にも、身近な自然を見直してもらい、自由な表現を楽しんでもらうと共に、それを子どもたちに見せながら、地域ごとのお面の特徴や歴史の話を聞いて、親しんでもらいたいと思い提案しました。お面を顔に着けて芝居を披露した人もいました。

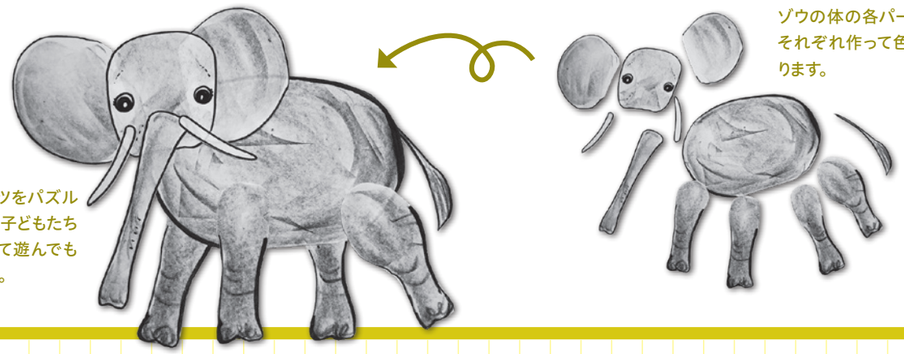


※各素材はボンドで貼っていきます

組み立てながら学ぶ野生動物

ガボンは野生動物の宝庫です。私はとくにマルミミゾウが気に入りました。ほかにも、カバ、クジラ、ゴリラ、海ガメ、バッファロー、マンドリルなど、この地域ならではの貴重な動物たちが多くいます。しかし、実際にそうした動物を見たことがある子どもは少ないため、動物を知ってもらい、興味をもってもらおうとして考えたのが、動物の教材です。

私は見本としてマルミミゾウを作りました。体のパーツを組み合わせていくことで、鼻が長いことや、牙があることなど、その動物の特徴に興味を持ち、また、保護の大切さを話して聞かせます。自分で『ぞうさん』を現地語訳して皆で歌ったり、現地語の歌に合わせてゾウの動きを楽しんだりもしました。また、指導員の方々は他の動物の教材作りにも取り組みました。



Text、図版作成＝阿部純一（本誌）　写真提供＝小川恵美さん

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

協力隊で身につけた スペイン語を生かして メキシコでの就職を決意

今月の先輩

菅 由布子さん Yuko Suga

ペルー／環境教育／
2018年度1次隊・埼玉県出身

就職先：自動車部品の製造会社

事業概要：日本企業とアメリカ企業の出資による合弁会社。自動車用部品の製造・品質管理・技術サービスのノウハウを持ち、高品質な自動車用部品を、メキシコ国内の日系や米国の自動車メーカー向けに製造・販売している。

菅 由布子さんの略歴：

1989年　埼玉県生まれ
2012年 7月 イギリスの大学を卒業
2012年10月～2017年10月 民間企業に勤務
2018年 7月 協力隊員としてペルーに赴任
2020年 4月 一斉帰国
2020年 7月 協力隊の任期終了
2020年 8月 メキシコの民間企業（営業職）に就職
2021年12月 同社を退職
2022年 6月 メキシコの民間企業（通訳職）に就職

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

1 協力隊時代　2018年7月～2020年7月

学校を巡回して子どもたちにゴミの分別や3Rについての環境教育を行う菅さん

配属先はアマゾン地域に隣接するモヨバンバ郡役所の固形廃棄物課でした。当時、JICAは有償資金協力で地方都市の処分場の建設を支援していました。私の配属先はその対象の一つであり、分別回収事業を拡充するための環境教育を行うことが要請内容でした。具体的には、小・中学校、高校、大人が集まる市場、公民館などで「ごみを道に捨てない」「ペットボトルや缶はリサイクルできる」といった基礎知識を事例を挙げながら伝えました。ポイ捨てをするバスの運転手も多いので、バス停に運転手を集めて講座を開いたこともあります。2020年4月にコロナ禍で一斉帰国し7月まで自宅待機となってからは、オンラインで同じく待期中の環境教育隊員同士で部会を開き、近況報告を行いました。

2 メキシコの民間企業 2020年8月～2021年12月

任期終盤にメキシコにある人材会社に登録し、2020年3月上旬から数社にエントリーしました。中旬から下旬にかけてオンライン面接を行い、4月に内定をもらいました。そして、20年7月に任期が終わったと同時にメキシコに渡航し、働き始めました。

会社員時代に旅行で訪れたカンボジアで短期間、個人主催のボランティアに参加したことで、海外で腰を据えてボランティア活動をしたい気持ちが芽生えたという菅 由布子さん。そこで応募したのがJICA海外協力隊だった。

環境教育隊員として赴任したペルーでの主な活動は、学校や地域を回り、子ども・市民向けに環境教育を行うこと。熱心なカウンターパートと共に受け入れ先を開拓していった。一方でオフィスにこもりがちで仕事に身が入らない同僚もいたという。

「同僚たちに自主的に動いてもらえるように『こうしたいけれどどう思う？』と問いかけて関心を持ってもらい、少しずつ引き込んでいきました」

任期中、JICAペルー事務所を通じてメキシコの人材会社で働くOVによるオンラインセミナーに参加する機会があり、メキシコには多くの日系企業が進出しており日本での実務経験を持つ人材を求めていることを知った。

「ちょうどスペイン語も理解できるようになっていたので、メキシコで働くことを考えるようになりました」

任期終盤、メキシコの人材会社に登録し、民間企業への就職を決めた。協力隊の任期終了後にメキシコで営業職として働き始めたが、一社目は社風が合わないこともあって退職した。現在は日米合同出資の自動車部品の製造会社に転職し、通訳として働いている。

「住居がある隣の市に自動車部品の製造をしている企業団地があったため、履歴書を持参してアポなしで会社を回りました。中に入れず守衛に託すこともありました。そうして応募した中の一社が現在の会社です。友人の知り合いが働いており、社員を大切にする会社と聞き、興味を持っていました」

メキシコ人の働き方は日本人と真逆で、自分で考えて動くのが基本。そのため指示どおりやることが苦手な面もあるという。

「でもメキシコで働くなら、メキシコの文化を尊重すべき。円滑に働けるようにお互いにコミュニケーションを取るようにしています」

3 メキシコで転職活動　2022年1月～

前職を退職後は、ゆっくりと転職先を見つけることにしました。採用情報はメキシコ日本商工会議所のホームページで探しました。加えて、住まいの隣のシラオ市に日系企業を含めて自動車部品の製造やその下請け、物流などの企業が100社以上集まっている工業団地があったので、気になる会社があると履歴書を持参しました。守衛に「仕事を探しています」と、日・英・スペイン語で書いた履歴書と職務経歴書を渡すこともありました。計20社くらいに渡したと思います。履歴書には協力隊での活動のことも書きました。協力隊に良いイメージを持っている人が多く、異文化理解や壁をつくらず現地の人とつき合える資質があると評価されているようです。

4 面接　2022年４月中旬

履歴書を渡した1社から、2カ月後くらいに、日本語・英語・スペイン語を話せる事務スタッフを探していると電話があり、面接をすることになりました。面接官は日本人2人、メキシコ人3人で、日本語、スペイン語、英語を交えてのやりとりでした。面接では、メキシコ人と働くことについてどう思うか、メキシコ人と働く上で気をつけていることは何かなど、前職の経験を踏まえ具体的なことを聞かれました。

5 健康診断・ドラッグテスト　4月下旬

2022年5月　採用決定

現在の仕事

事務スタッフを探していると聞かされていましたが、実際には日本語、スペイン語ができる通訳でした。通訳の経験も業界の専門知識もないので「即戦力を求めているなら私は向いていない」と伝えましたが、学びながら会社になじんでほしいと言われ、働くことを決めました。現在は品質の部署で、品質管理専門の日本人技術者と現地スタッフの間に入り、技術的なアドバイスの通訳をしています。最初は専門知識がなく、言われた言葉をただ伝えていただけでしたが、入社から1年がたち、だんだんと仕事内容を理解して通訳できるようになりました。

菅さんが暮らしているグアナファト州レオン市の街並み。職場までは従業員用の通勤バスで30分ほど

後輩へメッセージ

進路に悩んだ時には、周りの人にやりたいことを話してみるのも大切です。海外で働きたいと思うのであれば、OVや派遣国のJICA事務所の方に相談してみるのもいいと思います。私自身、転職活動中に、協力隊時代にお世話になったJICAペルー事務所の所長に相談に乗ってもらいました。すると、メキシコ事務所の所長につないでくださり、JICAの企画調査員（ボランティア事業）、大使館などで働いている方を紹介していただきました。結局、就職にはつながらなかったのですが、自分の経験だけではわからない多様な選択肢があることを知ることができました。

Text＝油科真弓　写真提供＝菅 由布子さん

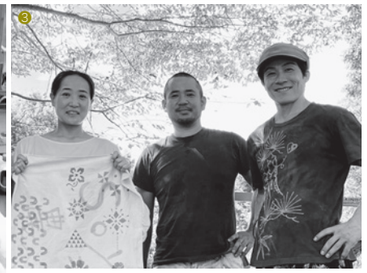
派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶私農耕SHOW～農タメ～を始動

宮 海彦さん Umihiko Miya
パナマ／体操競技／ 2004年度2次隊・東京都出身

❶「体操競技をしてきた自分にとってはたわいもない運動でも、パナマの人たちは喜んで学んでくれた。日々を楽しんでいる人が多く、学ぶことのほうが多かった」という隊員時代



❷7月に行った「農タメ」イベント、「田んぼPK」。サッカーゴールは竹と魚網で作った ❸森永武志さん（エルサルバドル／環境教育／2009年度4次隊）と、妻の真弓（旧姓田上）さん（エルサルバドル／手工芸／2009年度4次隊）とは、菊池市で偶然知り合い、意気投合。現在、宮さんは森永さんの畑「どんたけし農園」を手伝いながら、森永さんを含めた農家仲間と共に「私農耕SHOW～農タメ～」を行っている

❹取材日には、どんたけし農園で自然栽培した藍の葉を使い、真弓さんが講師を務めて「藍のたたき染めイベント」を開催した

農業+エンターテインメントで自給自足的生活の素晴らしさを伝える

畑や田んぼをテーマパークにして体を使ったゲームをすることが農作業にもなる。厳しい肉体労働のイメージがある農業に遊びやエンターテインメントの要素を盛り込んで自給自足的な生活の素晴らしさを伝える――。そんな「エンターテインメント農体験」、略して「農タメ」を提供しているのが熊本県菊池市在住の宮海彦さんだ。

宮さんには役者としての顔もある。世界的なエンターテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」のパフォーマーとして10年弱も活動し、その後も海外で活躍しているのだ。２０２３年の夏はカナダに2カ月間滞在し、上演時間が7時間に及ぶ舞台に出演。農業も農タメも演技も「やりたい」仕事であり、収入を一番の目的にしたことはないと言い切る。

「お金はただのツールであり、シンプルな暮らし方でも十分に豊かに幸せになれる、とＪＩＣＡ海外協力隊の2年間で確信したからです」

宮さんによれば、経済的にも物質的にも世界でトップクラスに豊かな国である日本で、自殺率が高かったり幸福度が低かったりするのはおかしく、人々の不安の根本原因は「お金が足りない」のではなく「生活ができなくなる」ことだと看破する。

「農業に携わって自給自足に近づけばその不安は解消されます。自分たちの生き方が遠い国の人の環境にも影響を与えていることに気づく余裕も生まれるでしょう」

個人を幸せにし、世界を平和にすること。農タメを手がけるグループ「私農耕（のうこう）ＳＨＯＷ（しょう）」の使命を明言する宮さん。その言葉と表情には気負いも迷いも感じられない。

しかし、協力隊に参加する前後の宮さんは大いに迷っていた。幼い頃から体操競技一筋の生活を送っていて、インターハイでは種目別の優勝を達成。オリンピック出場を目指したが、大学時代に視野が広がったこともあって練習に打ち込めなくなった。「そんな自分が体操界に居続けることへの恥じらいもあって応募したのが協力隊です。文化も言葉も異なる場所で自分は生きていけるのかを試す気持ちもありました」。

派遣国はパナマ。体操競技のコーチとして体育教育の普及やナショナルチームの強化に取り組んだが、教えてもらったことのほうが大きいと宮さんは振り返る。

「それまでの僕は競争して勝たなければいけないという価値観に浸り過ぎていました。パナマの人たちから勝ち負けではない豊かさを教えてもらいました。彼らは、たとえば市場経済が破綻しても食べていけます。ただし、乱開発などの環境変化には極めて弱い存在です。そのことを（開発する側の）先進国の人間である自分が知らずに生きるのはズルいとも感じました」

帰国後は国際機関への就職を目指して渡米。しかし、生活の糧を得るために就いた体操教室で子どもたちを指導したところ、まだまだ体が動く自分がいた。「体操競技への未練があり、人生で足りないものを埋める」気持ちでシルク・ドゥ・ソレイユに応募して合格。新規ツアーショー「トーテム」のメインロゴキャラクターにも抜てきされた。以来、世界各国の46都市で３０８５回の公演に出演した。その演出家に見いだされて、引退後も役者として舞台に立ち続けている。

「パナマでの経験で自給自足の暮らしには以前から強い興味がありました。でも、パフォーマーとしてやり切ったからこそ、納得して農業と農タメに取り組めているのだと思います」

シルク・ドゥ・ソレイユで得たものは納得感と海外人脈だけではない。世界最高峰のエンターテインメント集団でコーチも兼任し、人を喜ばせることの素晴らしさを知り、そのクオリティを高く維持する姿勢を身につけた。

「プロのエンターテイナーとして、面白いことだけを提供したい。楽しくて、一つひとつに意味があるような動きを農タメで提案しています」

宮さん自身はプロ農家ではない。菊池市で出会った農家の夫婦と意気投合。その農作業を手伝うことで食材を得て、農タメも一緒に運営している。

人は一人では生きていけない。しかし、お金はなくても生きていける。そのことを宮さんは全身を使って伝え続けている。

Text＝大宮冬洋 Photo＝ホシカワミナコ（本誌） 写真提供＝宮 海彦さん

宮さんの歩み

幼少よりさまざまなスポーツに打ち込み、高校時代に体操でインターハイ種目別優勝。

オリンピックを目指しましたがかないませんでした。人生に迷って、『自分はなぜ生きるのか、どう生きるのか』という哲学的な問いを立てたのです。『死ぬ時に笑って死ぬため』という答えが出ました。

2004年、明治大学経営学部を卒業後、すぐに海外協力隊としてパナマに派遣。

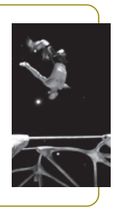
語学などの研修も受けられて、生活費も協力活動完了金も出してくれる制度は本当にありがたいと思いました。この2年間が僕の人生を変えたのは間違いありません。

2007年、国際機関への就職を目指して渡米。カリフォルニア州の体操教室でコーチとして働く。

子どもたちに体操を理論的に教えていたら、自分自身の練習に無駄が多かったことに気づきました。才能を生かし切らずに引退してしまったことを後悔し、可能性の限界までやり切りたいと強く思いました。

2009年、シルク・ドゥ・ソレイユに応募して合格。

まさに天職でした。できることなら一生続けたいと思いましたが、体はだんだん動かなくなります。レベルを落としてまでしがみつくのは誰のためにもならないと思い、2018年に引退しました。



2020年、自転車で日本一周。有機農家を巡る。

コロナ禍で役者としての仕事がなくなってしまったのがきっかけです。菊池市は移住者を柔軟に受け入れていて、地球環境に配慮した農業など好きなことをやっている人たちがいました。やりたいことがすぐにできる場所だと思い、移住を決めました。

2022年、菊池市に移住。志を共にする農家の下で空き家に住まわせてもらい、普段は農家と共に労働し、農家からは野菜を頂く。並行して仲間と「私農耕SHOW～農タメ～」を開始。

毎月１～２回は対面のイベントを行います。菊池に来られない人のためのオンラインサロン『農らいんサロン』も行っています。

https://nou-tame.com/

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

バングラデシュに7年ぶり協力隊派遣

バングラデシュで日本人も犠牲になった2016年のダッカ襲撃テロ事件によりJICA海外協力隊の派遣を中断していましたが、9月から派遣を再開いたしました。駐日バングラデシュ大使館では9月11日にJICA海外協力隊事業50周年記念式典が開かれ、新規隊員として9月派遣の田村亜紀子さん（理学療法士／2022年度9次隊）と10月派遣の清水あゆみさん（品質管理・生産性向上／2022年度9次隊）の2名が抱負を語りました。

1　2

関連記事：
クロスロード2023年1月号　派遣国の横顔
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから（バングラデシュ）

NEWS

「世界の笑顔のために」プログラム 2023年度の結果について

開発途上国で必要とされている、スポーツ、日本文化、教育、福祉などの関連物品を日本の皆さまからご提供いただき、JICA海外協力隊や在外事務所を通じ、現地の人々へ届けるプログラムです。2023年7月3日（月）～31日（月）に物品の募集を行い、マダガスカルに柔道着50着やブータンに下肢装具25個など、合計40カ国に対して約2,600点の寄贈を頂きました。9月末から各国に輸送しています。現在は年1回の実施で、次回は2024年度を予定しています。

詳細はこちら
https://www.jica.go.jp/activities/schemes/partner/smile/index.html

REPORT

グローバルフェスタJAPAN2023開催

9月30日(土)、10月1日(日)の2日間、国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN2023」が、東京国際フォーラムとオンライン配信のハイブリッド形式で開催されました。今年のテーマは、“世界をつくる国際協力。仲間は多い方がいい！”。著名人によるトークショーや体験ワークショップなど、盛りだくさんの内容となりました。JICA海外協力隊のブースには多くの方が訪れ、2023年度の秋募集に向けての相談や質問も多く寄せられました。また、オンラインではOVである奥山典子（旧姓 中鉢）さん（マレーシア／青少年活動／2015年度1次隊）が登壇され、協力隊の経験談に加え、現在運営しているNGOで行っているマレーシアと福島の人々を結ぶ取り組みについてもお話しいただきました。

NEWS

2023年秋募集、広瀬アリスさんがイメージキャラクター

JICA海外協力隊の秋募集では、広瀬アリスさんを起用したポスターや、新TVCM「人生なんてきっかけひとつ。タイ・ウボン」篇を2023年10月23日（月）より全国にて放映中です。

JICA青年海外協力隊事務局公式YouTube

JICA海外協力隊CM「タイ・ウボン」篇
30秒（2023秋）

https://www.youtube.com/watch?v=pI283pawB5o&t=6s

クロスロード ［ 2023年11月号 ］

第59巻第10号　通巻692号
発行日　2023（令和5）年11月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

「隊員めし」の取材で、東京・江戸川区のThies Caféへ。レシピを紹介したマフェはもちろん、ギニアペッパーの香りが広がるセネガルコーヒー「カフェトゥーバ」もおいしかった！（干川美奈子）

「特集」はITを用いた活動例。今さら感もあるテーマですが、とかく任地へ行くとがむしゃらに突っ走りがちなので、活動をうまく転がす一助になればと思います。がんばれ、ITオンチ！（飯渕一樹）

「シューカツ記」の菅さんはメキシコで就職されました。任期終了後も海外で活躍される隊員の方々の決断と勇気に、日本から出たことがない私は尊敬の一言です。がんばれ、私！（阿部純一）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

JICA海外協力隊派遣現況

（2023年9月末現在）

現在の派遣国数
73カ国

（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	27	3
エチオピア	1	
ガーナ	40	
ガボン	6	
カメルーン	18	
ケニア	38	
ザンビア	14	
ジブチ	7	
ジンバブエ	7	
セネガル	21	
タンザニア	10	
ナミビア	11	
ベナン	14	
ボツワナ	22	1
マダガスカル	31	
マラウイ	21	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	28	1
ルワンダ	35	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	14	
インドネシア	20	1
ウズベキスタン	10	2
カンボジア	30	
キルギス	16	
ジョージア	5	1
スリランカ	16	
タイ	20	3
タジキスタン		1
ネパール	1	
バングラデシュ	1	
東ティモール	13	
フィリピン	5	
ブータン	23	6
ベトナム	42	
マレーシア	16	7
モルディブ	1	
モンゴル	22	3
ラオス	15	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
サモア	2	1
ソロモン	12	
トンガ	4	1
バヌアツ	4	1
パプアニューギニア	3	
パラオ	22	3
フィジー	12	1
マーシャル	1	3
ミクロネシア		2

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	27	
チュニジア	17	1
モロッコ	14	
ヨルダン	26	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		4	1	1
ウルグアイ		4		
エクアドル	12			
エルサルバドル	18			
キューバ		3		
グアテマラ	26	1		
コスタリカ	17			
コロンビア	8	2		
ジャマイカ	4			
セントルシア	12			
チリ	10	1		
ドミニカ共和国	15		7	
ニカラグア	10	2		
パナマ	3	1		
パラグアイ	25	3	3	
ブラジル			34	2
ベリーズ	7			
ペルー	27	2		
ボリビア	23	2	1	
ホンジュラス	14			
メキシコ	8	6		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中（男性／女性）	1,018（416／602）	78（64／14）	46（18／28）	3（2／1）	1,145（500／645）
累計（男性／女性）	47,048（24,832／22,216）	6,651（5,370／1,281）	1,594（616／978）	551（255／296）	55,844（31,073／24,771）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

9月のチリは活動予定を立てられない!?

「el 18（エル ディエシオチョ）だから、無理だよ」――。かつて、「この週は予定がないから、これをしたい」と提案した時に、カウンターパートから言われた言葉です。

最初は18が何を指すのかがわからなかったのですが、後に判明したのは、「18は9月18日、つまりチリの独立記念日を指す」こと。しかも、ただの祝日ではありません。18日を挟んだ前後はどこも休み。9月に入るとすぐに町には国旗が飾られ、グッズの販売が始まったりするので誰もがそわそわし始めてしまう――。そんな、クリスマス・正月以上の一大イベントだったのです!!

Illustration＝牧野良幸　Text＝ホシカワミナコ（本誌）

el 18の期間は、親戚で集まって過ごします。私もカウンターパートや同僚に誘われてお邪魔しましたが、どの家庭でもチリ料理やバーベキューを食べたり、凧揚げや独楽回し、袋跳び競走といったゲームをしたり、語らったり。広場には食べ物や飲み物、アルコール類などの屋台が立ち並ぶ会場「Fonda（フォンダ）」もできます。伝統舞踊の「Cueca（クエカ）」を踊ったり、チンドン屋が音楽を奏でながら練り歩いたりとにぎやかです。

チリの人たちはほかの中南米の国に比べて仕事には勤勉な印象がありますが、el 18は特別。実はこの期間が終わった翌週末も、「el 18 chico（チコ）」となり、ミニパーティを催すことも多いので、結果、9月中はお祭りムードが続きます。

当初は活動が進まずモヤモヤした私も、今では楽しみにしている行事です。

横川信子（よこかわのぶこ）さん
ボリビア／体育／1996年度1次隊、SV／チリ／体育／2013年度9次隊、SV／チリ／体育／2015年度3次隊、SV／チリ／体育／2018年度9次隊、SV／チリ／体育／2022年度2次隊・神奈川県出身

任地の食生活に彩りを！

隊員めし

＼教える人／

元木康貴（もとき やすたか）さん
セネガル／行政サービス／
2009年度4次隊・東京都出身

大学卒業後、総合重工業メーカー勤務を経て東京都江戸川区職員に。現職参加で協力隊に参加し、セネガルのティエス州で病院の5S活動などに従事（写真はカウンターパートと）。帰国後、復職。セネガル料理を提供する「ティエスカフェ」の実店舗およびキッチンカーの営業スタイルを企画し、実妹が経営に当たっている。著書に『途上国における病院環境の改善日誌 ～西アフリカ・セネガル共和国』。

今月の料理

From Senegal

マフェ

（ピーナッツバターの煮込み料理）

●材料（3～4人分）

- 食用油……大さじ5程度
- にんにく……2かけ
- 玉ねぎ……3～5個（1kg）
- カットトマト缶……400g
- 水……350ml
- 好みの具材…ニンジンやジャガイモなど
- ブイヨン（手に入るならジュンボ）……2個
- 塩……小さじ2
- 無糖ピーナッツバター……100g
- 白米……人数分
- 好みで　飾り用の具材……ゆでたカボチャやインゲンなど
- 好みで　乾燥パセリ……少々

●レシピ

❶白米を炊く。にんにく、玉ねぎ、好みの具材をみじん切りにする
❷油を入れたフライパンににんにくを入れ、焦げないように炒める
❸❷に玉ねぎを加えあめ色になるまで炒める
❹❸にカットトマト缶（ホールの場合は小さくカットする）、水350ml、ブイヨン、塩、好みの具材を加えて15分程度煮込む
❺❹に無糖ピーナッツバターを入れて5分煮込む
❻皿に白飯を盛り、❺をかけ、飾り用の野菜やパセリをのせる

<アドバイス>

マフェはセネガルで日常的に食べられている料理です。調味料は本来、ブイヨンではなく「ジュンボ」という固形調味料を使います。調理のポイントは玉ねぎをあめ色になるまで根気よく炒めることです。ピーナッツバターは無糖がベストですが、手に入らなければ砂糖が入ったものでも。ちょっと甘くなりますがおいしいと思います。

＼CHECK／

Thies Café（ティエスカフェ）は、健康的な食にこだわりながら、セネガル料理やカフェトゥーバ（香辛料珈琲）をはじめとするドリンク、スイーツなどを提供するカフェ。東京都江戸川区の実店舗は土日営業、平日はキッチンカーで東京・丸の内や赤坂・迎賓館などで営業中。▶https://thies-cafe.com/

レシピ・写真提供＝元木康貴さん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝干川 修

クロスロード 2023年11月号
2023年11月1日発行（毎月1回1日発行）第59巻第10号 通巻692号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

＼公開！／

私の派遣国生活

［ セルビア ］

酒井貴子（さかいたかこ）さん

（観光／2021年度4次隊・東京都出身）

暮らしている市、町、村

石碑のある丘のカフェ

古い民家を移築して伝統的な集落を復元したシロゴイノの野外博物館も酒井さんお薦めの場所。昔の生活の様子や農産加工品作りの道具なども見ることができる

ズラティボルの中心から30分くらい歩いたところに、石碑のある丘があり、360度パノラマの美しい景色が見えます。カフェもあって、休みの日に散歩がてら訪れて、本を読んだりして過ごすのが気に入っています。冬も雪景色が美しく、夏と冬で違った表情が楽しめます。

活動の様子

ズラティボル観光協会の同僚たちと酒井さん

ズラティボル観光で人気のパノラマ式ゴンドラ

標高約1000メートルに位置するズラティボルの観光協会に赴任しています。夏は人気の避暑地、冬は一面の銀世界になり、スキーヤーも多く訪れます。観光プロモーションとマーケティングをメインに、旅行博や他都市でのＰＲ、イベント運営など、活動内容は幅広く、新しいアイデアの提案などが必要になる活動です。

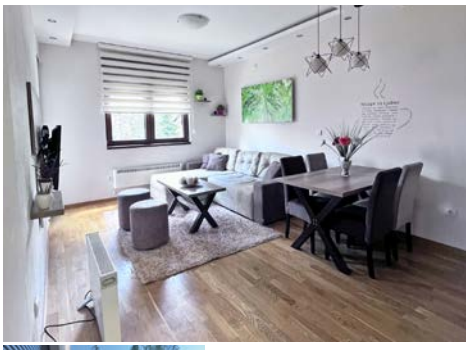
食べ物

コンプレット・レピニャ

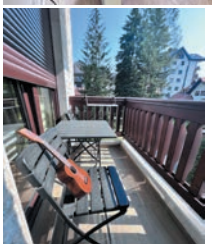
牛乳を煮込み、上澄みを発酵させて作る乳製品カイマックが地元の特産で、それと卵をパンの上でまぜ、オーブンで焼いたコンプレット・レピニャという料理が好きでよく朝食で食べます。フレンチトーストを少ししょっぱくした感じの味です。また、地元のスーパーマーケットでしょうゆは手に入るので、肉じゃがなど日本食もよく自炊しています。

伝統的な製法の干し肉も特産。少し塩気が強いが、肉の味が濃厚でおいしい

住まい



上：キッチンが一緒になったリビングルーム、ベッドルーム、トイレ・バス（シャワーのみ）という間取り
下：松の木が眺められるバルコニーで、ウクレレを弾いたり、食事をしたりするのが楽しみ



家具つきのアパートメントに住んでいます。冬は雪が積もるので、職場まで歩いて5分の立地に決めました。夏は涼しいためクーラーはありません。冬はマイナス18度まで気温が下がることもあり、暖房は必須です。キッチンは電気のIHクッキングヒーター式でコンロは2口あり、基本自炊しています。

写真提供＝酒井貴子さん　Text＝阿部純一（本誌）

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
JICA ジャイカ